

大俱利伽羅ラブソディ

立花祐子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

歴史改変を阻止するために生まれた刀剣の付喪神「大俱利伽羅」は、戦いを好まない審神者の本丸でのんびりと過ごしていた。そんなある日、2振り目の「大俱利伽羅」が鍛刀され：

……

刀剣乱舞の二次創作です。ピクシブにも投稿しています。

刀剣乱舞のゲームから動画にはまり、特に「大俱利伽羅」さんのモデルさん達が、キャラクターの中で特に個性的なことから思いつきました。

かなり、元のキャラクターさんのイメージから離れることもあると思います。

元のキャラクターのイメージを大事にされたい方は、申し訳ありませんが、お読みにならないことをお勧めいたします。

目次

第2部隊	1
甦り	9
記憶のかけら	15
3代目「大俱利伽羅」	24
3代目の憂鬱	34
大俱利伽羅部隊	42
〈閑話休題〉大俱利伽羅と乱藤四郎	54
闇落ち	58
それぞれの劣等感	72
友を殺せるか	81
〈閑話休題〉2代目の女装	90
4代目の焦り	93
大俱利伽羅達の決意	102
永遠の別れ	115
遺されたビデオレター	124
笑顔でさよならを（終）	131

第2部隊

本丸―

第1部隊の大俱利伽羅は、自室の畳の上で体を横たえていた。
出陣の後だ。

怪我はないが、思ったより体が重い。

(たいした相手じゃなかったのにな。)

出陣は久しぶりだった。この主(あるじ)は、出陣や遠征が嫌いなのだそうだが「それだと、付喪神(つくもがみ)としての存在意義がないし、レベルもあがらない」…と、へし切長谷部が主に進言したのだそうだ。

「俱利伽羅、おやつ作ったよ。食べるかい?」

障子が開き、燭台切光忠が団子の乗った皿を持って現れた。

「…ん…」

大俱利伽羅はゆっくりと体を起こした。

……

「そうそう、この前の鍛刀で「大俱利伽羅」がでたって、知ってた?」
その光忠の言葉に、大俱利伽羅は最後の団子を茶で飲み下して「俺?」と言った。

「もちろん君じゃないけど、2振り目の「大俱利伽羅」が出たんだった。」

「ふーん」

「興味ない?」

「あるわけないだろ。」

「だよね。」

光忠はそう苦笑して答えながら、茶を一口含んだ。

「僕は興味あったから、ちよつと第2部隊の宿舎に行ってみたんだ。」

「それは禁止されてるんじゃないか?」

「第2部隊は2振り目達だけで構成されてるから、1振り目が行ったら混乱が起きるって理由だろ?でも、光忠(ぼく)は2振り目がいないから、別にいいかと思ってさ。」

「…それで？」

「2振り目の「大俱利伽羅」君、君とはまた違う顔だった。幼い感じかな。」

「顔が違うのに、俺ってわかるのか？」

「腕の俱利伽羅文様が何よりの証拠だろう？服も一緒だし、武装も何もかも一緒なんだけど、顔だけが違う。あ、なんとなく性格も違うかも。第2部隊はまだ、大俱利伽羅君除いて、短刀君達だけじゃない。庭で遊んでる短刀君達を、縁側で座って見ながら微笑んでたよ。」

「俺が微笑んでただと？」

「君じゃないけど、ま、馴れ合わない「大俱利伽羅」が微笑んでたってことだね。」

「気色悪い」

思わず顔をゆがめて言った大俱利伽羅に、光忠が声を上げて笑った。

……

光忠は、畑で野菜の収穫をしていた。今日の夕餉の準備である。主に命令されたわけじゃないが、夕餉の準備は主に光忠がする。元々、好きな性分だ。

「今日も、綺麗な色に染まったねえ。」

手に取ったトマトを優しくもいだから、そう言った。野菜に話しかけるのは、光忠の癖だ。同じ命あるものだということはわかっている。そして、こうして収穫して自分達が食することによって、その命がつかえることも。

「ちやんと、おいしくいただくからね。今日は、君をどう料理しようかなあ。トマトソースグラタンなんていいかな。」

その時、そばに誰かが立った。足音もしなかったので、光忠は驚いて顔を上げた。幼い顔が自分を見下ろしている。

「ああ！2代目の大俱利伽羅君か。」

「すいません。光忠さん。」

2代目大俱利伽羅が、ぺこりと頭を下げた。こんなこと、1代目はしないな…と光忠は心の中で笑いながら、トマトの入った籠を持って

立ち上がった。

「どうしたの？」

「第1部隊の畑には近寄らないように言われていたんですが…どうしても、野菜が足りなくて。」

「ああ、第2部隊はまだ人数も少ないしね。食事の準備とか、短刀君達の世話とか皆君がやってるんだって？」

「え？どうしてそんなこと？」

「主から聞いたんだ。君1人に負担がかかってるから、なんとか鍛刀を増やして、第2部隊に太刀か打刀を入れるってさ。」

「そうですね。そんなことを主が…」

大俱利伽羅が、頬を赤らめてうつむいた。1代目より少し幼い顔とはいえ、大俱利伽羅には違いない。珍しいものを見るような気がして、光忠はつい2代目の顔を見つめていた。

2代目は、不思議そうに光忠を見返した。

「?どうしました？」

「え?あ、ごめん。僕んところの大俱利伽羅は、そんな表情しないなって思ってたね。」

「先輩は、しないでですか？」

「先輩って呼んでるんだ!あはは、なるほどね!」

光忠はそう笑ってから、2代目に尋ねた。

「その先輩の顔、見たことある?」

「遠くから、お姿だけは。僕とは違う…とても強そうな、雰囲気でした。」

「うん。レベルはかなり高いよ。君のレベルは今どれくらい?」

「まだ、出陣に2回しか行っていないので…そんなに…」

「そうか。うちの主は戦闘嫌いだからなあ。」

「僕も、先輩みたいに強くなれるでしょうか?」

「手合わせくらいなら、主に言えばさせてもらえるんじゃないか?また頼んであげるよ。」

光忠がそう言うと、2代目は少し不安そうな表情をしながら微笑んだ。…期待はできないのだろうか。

……

「断る！」

1代目の大俱利伽羅は、不機嫌な表情で、そう光忠に一喝した。光忠は（やっぱりな）と心の中で苦笑した。

「主の命令でも？」

「それをさせたのは、光忠だろ？絶対に嫌だ。」

「どうして？自分より強くなられては困るからかい？」

「そんなんじゃない！」

大俱利伽羅は、光忠から顔を背けながら答えた。

「人に頼って強くなるなんて、甘ったれた考えが嫌なんだ。」

「だって僕達が入った頃と違って、出陣ほとんどないんだよ？どうやって、強くなるんだい？」

「手合わせは、別に俺じゃなくていいだろう。」

「そうだけど。」

「とにかく俺はいやだ。」

「そーですか。」

これ以上の説得は無理だな、と光忠は早々にあきらめることにした。大俱利伽羅は不機嫌な表情のまま、「もう寝る！」と言い、光忠を見上げた。

……

何か慌しい物音で、大俱利伽羅は目を覚ました。まだ朝だと思っていたが、明るさからして、昼近くだとわかった。

「やべー！なんで光忠起こしてくれなかったんだ!! 今日、畑仕事の当番なのに！」

そうぶつぶつ言いながら立ち上がり、庭に面する障子を開いて驚いた。

第1部隊の打刀達が、血に染まった短刀達を横抱きにして走っている。

「なっ!? どうしたんだ! ……!! ……長谷部! 何があったんだ!？」

大俱利伽羅は裸足のまま庭に飛び降り、今剣を抱いて走っている長谷部を追いかけた。

長谷部が息を切らしながら答えた。

「第2部隊が、出陣でほぼやられたんだ！手入部屋もいっぱいだから、とりあえず第2部隊の宿舎で俺たちが手当てしないと…」

「大俱利伽羅は!?!」

「大俱利伽羅?」

「俺じゃない!2振り目の奴だ!」

大俱利伽羅はそう言いながら、第2部隊の宿舎の玄関を開き、長谷部を先の中に入れさせた。長谷部は軽く会釈をして、また走り出しながら答えた。

「彼は一番重篤な状態なんだが、短刀達を先に手入れさせろって言うてな。部屋で寝かせてる。」

「あいつ独りでかつ!?!」

「光忠が行ってる!」

「!よし、俺もそっちにいるから、手入部屋が空いたら呼びに来てくれ!」

「わかった!」

長谷部が、開いたままの障子から部屋に入ったのを見届けてから、大俱利伽羅は反対側に走った。

(俺達の宿舎と同じ作りなら、奥にまだ部屋が…)

そう思いながら走っていると、光忠の声がした。「気を失うな!」と叫び続けている。

その声のする部屋の障子を開け放すと、ぐったりした2代目「大俱利伽羅」の姿が、目に飛び込んできた。

「俱利伽羅!?!」

2代目に覆いかぶさるようにしていた光忠が、驚いた表情で大俱利伽羅を見上げた。

「主は、こいつらにどんな出陣に行かせたんだ!!レベルは考えてなかったのか!?!」

大俱利伽羅が、光忠にそう怒鳴った。光忠は沈うつな表情で2代目に目を落としながら答えた。

「…短刀たちが、レベルを上げたいと隊長のこの子に懇願したらしい。

それで、この子も承諾して、主に頼んだそうだ。主は、何度もだめだと言ったが、結局押し通した。…それで、こんなことに…」

「先輩」

体中血だらけの2代目が、大俱利伽羅をうつろな目で見上げていた。

「先輩?…俺のことか?」

大俱利伽羅は、2代目の横に屈みこんだ。

「馬鹿かお前は!!短刀たちが何を言ったか知らんが、無理な出陣をさせたお前に責任があるんだぞー!」

「俱利伽羅!!今は怒る状況じゃない!」

「わかってる!!」

大俱利伽羅は、光忠にそう言い返してから口をつぐんだ。

2代目の息がかなり荒い。そして…姿が少し消えかかっている。

(…まずい、このままじゃ死んじゃまう…)

大俱利伽羅と光忠は、同じ事を思っている。どう見ても、助かる様子が無い。2代目は何度もまぶたを開こうとするが、限界が来ている。

「だめだ!目を開けろ!!」

大俱利伽羅が、2代目の頬を軽く叩きながら言った。2代目が目を薄く開いた。

「体が治ったら、俺がじきじきに手合わせしてやる!!」

大俱利伽羅のその言葉に、2代目の目が少し見開かれ、口元が少し緩んだ。

光忠が微笑んでいる。

「だっ…だから死ぬな!!気をしっかり持て!!」

「はい」

障子がいきなり開け放たれた。長谷部が息を切らして立っている。「手入部屋がもうすぐ1つ空くぞ!そいつを今のうちに運んでくれ!」

「!わかった!」

光忠はそう返事をする、2代目の上半身を起こそうとした。が、

大俱利伽羅がそれをさえぎった。

「俱利伽羅？」

「俺が運ぶ！光忠は先に手入部屋に行ってくれ！」

「…よしー」

光忠は何かを悟ったように口元に笑みを見せると、先に立ちあがった。

「2代目君、1代目の手合わせが終わったら、僕の手料理を食べてもらうからね。楽しみにしてるんだよ。」

2代目が光忠を見上げて微笑み「はい」と答えた。光忠は微笑み返すと、すぐに険しい表情を外に向け、走り去った。

大俱利伽羅が2代目の顔を見下ろした。確かに自分より幼い顔をしている。だが、今はそんなことを考えている場合じゃない。

「体を上げるぞ、いいか？」

「はい」

大俱利伽羅が、2代目の背に手を差し入れ、ゆっくりと上半身を上げた。そして、2代目の腕を自分の肩に回そうとした。

「…っ!!」

2代目の顔が痛みに歪む。

「！大丈夫か?!すまない、ゆっくりと動かすぞ。」

2代目はうなずいた。返事をするのも辛い様子である。大俱利伽羅は、2代目の頭を自分の肩にもたれさせ、両膝の下にも反対の腕を差し入れると、ゆっくりと立ち上がった。

(体がかなり冷たい…。それに軽すぎる。)

2代目の姿が消えかかっている。大俱利伽羅が1歩踏み出したとき、耳元で「先輩」というささやき声がした。

「今しゃべるな！後で聞く！」

大俱利伽羅がそう怒鳴りつけると、閉じていた2代目の目が少し開いた。

「…暖かい…」

2代目はそう呟くと、再び目を閉じた。そして、体中の力が抜けた。
「!？」

2代目の体は、大俱利伽羅の腕の中で、ダイヤモンドダストのように
儂く散り、消えた。

甦り

本丸 第1部隊の宿舎―

燭台切光忠は、みたらし団子に乗せた皿を持ち、自室の障子を開いた。

…部屋の隅には、同室仲間の「大俱利伽羅」が、立てた両膝に顔を伏せて座り込んでいた。

「いつまで、そうしているつもりだい？」

光忠は、あえて明るい声で言った。

2代目「大俱利伽羅」が死んで2日が経った。1代目「大俱利伽羅」は、まだ、そのショックから立ち直れていないのである。

体を横にすることもない。時々、顔を上げて目を拭うこと以外は、ずっと同じ体勢のままである。ただただ、立てた両膝に顔をうずめ、座り込んでいる。

光忠も、立ち直れたわけじゃない。だが、同じように落ち込んでいたところで、どうなるわけでもない。

「俱利伽羅、何か食べないと。」

この2日間、大俱利伽羅は水も食物も全く口にしていない。付喪神だから、食べなくても存在することはできるのだが…。

「…俺よりも…」

唖れた声で大俱利伽羅がつぶやくように言った。光忠は「ん？」と優しく答えた。

「主（あるじ）は、大丈夫か？」

その言葉に、光忠は嘆息した。一番、聞かれたくない言葉だった。

「…寝たきりだ。長谷部がつきつきりで看病しているが…何も食べられないようだ。」

「それこそ、死んじゃう…」

「ん。主は僕達と違って「人」だからね。…長谷部が無理やり「粥」を食べさせたそうだけど、3口で吐いてしまっって…」

その光忠の言葉を聞いた大俱利伽羅は、大きく嘆息して顔を上げた。目がかなり腫れている。

「…2部隊の短刀たちは？」

「お前と同じだよ。皆、臥せってる。…2代目君が死んでから、部隊構わず宿舎を歩き来できるようになったから、打刀達が交代で様子を見に行っているんだけど…誰一人、起き上がらないんだって。…今剣が「自分のせいだ」って、そればかり言ってるって。」

大俱利伽羅は、長い嘆息を漏らした。

……

「…暖かい…」

2代目「大俱利伽羅」が消える直前に聞こえたその囁き声は、今もまだ「大俱利伽羅」の耳に残っている。

(…あいつも光忠がいるのを知って、嬉しかっただろうに…)

「大俱利伽羅」は、伊達政宗家に戦後まで残された刀剣である。「燭台切光忠」と「鶴丸国永」という刀剣も同じ伊達家にあった…が、伊達家に最初からいた「光忠」は徳川家に進呈され、その後「鶴丸」は皇室に献上された。「大俱利伽羅」が他と馴れ合わないのは、元々、人付き合いが苦手な性分であることも確かだが、刀剣達と別れを繰り返したためでもある。

2代目「大俱利伽羅」もその記憶が同じなら、本丸に来た時は、寂しかったに違いない。1代目の自分だって、鍛刀直後、光忠や鶴丸の姿を探したほどだ。

…そして「光忠」は先にいた。関東大震災で「焼失」したと思っていた大俱利伽羅は、不覚にも光忠の前で涙を零してしまった。

2代目は、恐らく1代目の自分がいたために、そして、部隊間の関わりを禁止されていたために、光忠に会った喜びすら押し殺していたのかもしれない。その上、部隊長にされ、短刀達の世話までさせられて…挙句の果てには…。

大俱利伽羅は、頭を抱えるようにして、再び膝に顔を伏せた。

……

「どうしたものか…」

「打刀」へし切長谷部は、光忠にそう言ううなだれた。主の様子は変わらない。水だけはなんとか飲めるようだが、それ以上のものは全く受

け付けけない。食べさせてもすぐに吐いてしまうのだ。

光忠も、何もできない自分にいらだちを憶えていた。

「鍛刀で、2代目「大俱利伽羅」を甦らせるってのは、無理なのかな？」

その光忠の言葉に、長谷部は首を振った。

「無理に決まってるだろう。ただでさえ「鍛刀」は何が出てくるかわからないのに、同じ「大俱利伽羅」を甦らせるなんて…。」

「だよね。」

2人は同時に嘆息した。

「でもこのままじゃ、本当に主が死んじゃうぞ。やってみるべきことは、やってみないか？だめ元で。」

その光忠の言葉に、長谷部が眉を寄せた。

「…何か、秘策でもあるというのか？」

光忠がうなずいた。

「悪いが、主の電腦箱（パソコン）を勝手に借りて、調べてみたんだ。」

「何っ!?何を勝手に主の…。」

「長谷部！今はそんな事言ってる場合じゃない！」

長谷部は、少し不満気な表情をしながらもうなずき「どうするんだ？」と光忠を見返した。

……

「あいつを甦らせる!？」

大俱利伽羅は、目の前で微笑んでいる光忠を見た。

「…どうやって？鍛刀なんて、何が出るか…。」

「そこさ。…2代目君の刀身が、かけらだけど残っていたら？」

「!!…まさか、そのかけらを…?。」

光忠が、ゆっくりうなずいた。

「そう、鍛刀の炎に放り込むんだ。だが、うまく甦ったとしても「大俱利伽羅」の元の記憶しか戻らない。俺達の事までは憶えていないだろう。」

「それじゃ、甦らせる意味がないんじゃないか？」

「いや。2代目君に、新たな記憶を作ってあげるんだよ。本人は憶えてなくても「ここに来てよかった」って思えるような、幸せな記憶を

作ってあげるんだ。」

大俱利伽羅は、ただ目を見開いている。

……

「主の許可が下りた。さっそく、始めるぞ。」

鍛刀部屋で、長谷部はまだ納得いかないような表情で光忠に言った。成功するようには思えない。：正直、光忠本人もそう思っている。

「俱利伽羅：始めるよ。いいかい？」

光忠が、ただ黙って立っている大俱利伽羅に振り向いて言った。大俱利伽羅の手には、2代目「大俱利伽羅」の刀身のかけらが乗っている。

大俱利伽羅は、黙ってうなずいた。

……

鍛刀が始まってから、30分が経過した。長谷部、光忠、大俱利伽羅は、ただ黙って鍛刀の炎を見つめている。

「光忠」

「ん？」

光忠は、うつむく大俱利伽羅に振り返った。

「なんだい？俱利伽羅。」

「俺が、折れたときは…」

「…ん。」

「絶対に甦らせるな。」

長谷部と光忠は目を見開いて、大俱利伽羅を見た。大俱利伽羅は、顔を上げて言った。

「今になって後悔してる。…やつが俺と同じなら、本当は甦りたくないんじゃないかって思えて…。」

「！俱利伽羅…！」

「もし、鍛刀が失敗したら、やつが甦りたくないという意味だと取りたい。」

「……」

長谷部が、ゆっくりとうなずいた。

「わかるよ。そのお前の気持ち。」

光忠は顔を背けた。

「僕が、余計な事をしたと言いたいのか？」

「光忠、そうじゃない！」

大俱利伽羅は、光忠の前に立った。

「そうじゃない。甦るかどうかは、やつが決めることだと言いたいんだ。」

「2代目が出なくても、気にするなって事だよ。」

長谷部が、大俱利伽羅の言葉に添えるように言った。光忠は驚いた表情で、2人の顔を交互に見ると、

「わかった。お気遣いどうも。」

そう言つて、苦笑いした。

……

炎がいきなり燃え上がった。

「!!終わるぞー！」

長谷部が思わず声を上げた。

光忠、大俱利伽羅は、炉を凝視したまま動かない。

——炉から光が放たれた。あまりの眩しさに、3人は思わず腕で目を覆った。

「光忠？」

その声に、3人は腕を下ろして、炉の前に立つ付喪神の姿を見た。光忠が思わず声を漏らした。

「!!2代目君……」

幼い大俱利伽羅の顔が、そこにあつた。

—その後—

1代目大俱利伽羅、自室で膝を立てて座り込み、その膝に顔をうずめてブツブツと呟いている。

「やつが憶えてないのはわかってるよ。だから、俺の事「誰？」って言

われても気にしてない。でも、ちよつとくらい憶えててもいいじゃないか。あいつ俺の腕の中で死んだんだぞ。「あつたかい」って言ったんだぞ。でも「誰？」はないんじゃないか？「誰」ってなんだよ。誰って俺だよ！大俱利伽羅だよ！悪いかよ。誰って誰だよ。俺ってなんだよ…（延々と続く）」

…その姿を少し開いた障子から覗き見ている光忠。

そして、遠くから聞こえる2代目「大俱利伽羅」の声…

「光忠ー！どこー？…光忠ってばー！やっと会えたのに、どうして逃げるんだよー！どこだー？」

光忠はため息をついた。

「あー…なんか、どっちもめんどくさくなってきた。」

傍にいる長谷部が笑った。

記憶のかげら

1代目「大俱利伽羅」の怒号が、本丸の庭中に響き渡っている。「立てっ！まだまだだぞっ！そんなので、出陣なんて出られるか!!」

2代目「大俱利伽羅」は、息を切らしながら首元に突きつけられている刀を払った。そして、自分の刀身をつかむと、ゆっくりと立ち上がった。

「おいっ!!手合いは木刀でやれっっていったらどう!?」

燭台切光忠がそう叫びながら、宿舎から驚いた様子で駆け寄って来た。

「本体使っつて、2人とも大怪我したりしたら、どうするんだ!」

「そんなへまはしない」

2人の大俱利伽羅が、同時に光忠に向けて言った。

「わー…なんか、すごい違和感ー。」

光忠が2人を見比べながら、そののんきな声を上げた。

「どういう意味だ?」

また大俱利伽羅2人でそう唱和して、お互いの顔を見た。

「俺の真似するな。」

「真似しているのはそつちだ。」

「なんだと?先輩に向かっていう言葉か!」

2代目は、ふんと横を向いた。

「まるで兄弟喧嘩だね。」

光忠はそういいながら笑った。

1代目が2代目を指差しながら言った。

「光忠、こいつ全然かわいくない!!鍛刀失敗だったんじゃないか?」

「人を指差すな!!」

「やかましい!俺達は人じゃない!」

「屁理屈言うな!」

「なんだとーお?」

1代目がその場に刀身を放り投げて、2代目につかみかかった。光忠は驚いて駆け寄った。

「ちよつちよつと、やめ…」

「そんななまいきな事を言うのは、どの口だ!!この口かつ!」

組み伏した2代目の両頬をひっぱり伸ばしたとたん、1代目が吹き出した。止めようと後ろから覗き込んでいた光忠も思わず笑った。

「おもしろい顔―!」

「~~~~~!」

2代目は言葉がでないまま、必死にあがいている。

(なんだかんだ言つて、仲いいんじゃないか。)

光忠はそう思いながら体を上げ、芝生まみれになりながら格闘する2人の大俱利伽羅を背にして、宿舎に向かった。

……

「2代目君を出陣に?」

へし切長谷部の部屋で茶をすすりながら、光忠は前で同じように茶をすすっている長谷部に言った。

「ああ、主がね。そろそろいいんじゃないかって。」

「第2部隊の隊長は?」

「1振り目から誰か選ぶよ。短刀達しかいないとはいえ、まだ経験の無いやつを隊長にはできないだろう。」

「ん。それがいい。」

長谷部と光忠は同時に茶をすすった。

「大俱利伽羅たちは、どんな様子だ?」

「毎日、兄弟喧嘩してるよ。楽しそうだ。」

「そうか。」

長谷部が笑った。

「やっぱり、大俱利伽羅は大俱利伽羅なんだな。前の2代目が控えめな子だったから、ちよつと心配だったんだが。」

「僕もだ。でも、1代目にはない礼儀正しきは残ってるよ。出陣もちゃんと隊長に従うだろう。」

「1代目の初出陣は、大変だったからなあ。」

長谷部が、思わず吹き出しながら言った。

「群れるつもりはないとか言つて、勝手にどっか行ってしまつて…」

「あの時の隊長は、長谷部だったか。」

「ああ。…でも、戻ってきたときは、傷ついた前田を抱えてきてくれた。彼が手当てをしてくれてなかったら、折れてただろうな。」

「俱利伽羅らしい。」

光忠が眼を細めながら言った。息子を褒められた、母親のような表情だ。

……

「やつを出陣に？まだ早いんじゃないか？」

1代目の大俱利伽羅が、口に持っていた箸を止めて光忠に言った。夕餉の途中である。

「主が許可を出したそうだよ。レベルも無理の無いところにするって。」

「それは当然だろうが…。まさか…」

「隊長にはしない。1振り目から誰か出すって。」

「俺が行く！」

「大俱利伽羅2人はいらんだろう。」

光忠はそう笑いながら言い、味噌汁をすすった。

「それに、出陣先で喧嘩されても困るしな。」

「…やつが生意気なだけだ。」

「他人の事言えたことか。…心配なら、心配だと正直に言ったら？」

「心配なんかするかつ！ただ、他に迷惑をかけないか不安なだけだ！」

「はいはい。」

大俱利伽羅は不満そうに箸を置き、立ち上がった。

「こら。ぐちそうさま、しなさい。」

光忠がたしなめた。大俱利伽羅はふてくされ顔で再び座った。

……

第2部隊の隊長は「獅子王」と決められた。

「頑張るんだぞ。」

出陣の朝、光忠は2代目大俱利伽羅の肩に手を乗せた。2代目の顔色は悪かった。ただ、こくりとうなずき、光忠の遠く後ろにある第1部隊の宿舎の方をちらと見た。

…玄関先に、1代目が腕を組んで玄関にもたれて立っていた。2代目が見たと同時に、横を向いた。

(ほんと、素直じゃないんだから。)

その1代目の様子に、光忠は苦笑した。

……

「あーどうしたんだろう…」

光忠は庭に向かう框に座り、思わずそうため息混じりに呟いた。

日が暮れかかっている。出陣した第2部隊が帰ってこない。

「まさか、全滅なんてこと無いよな。レベルに無理の無いところだったし…獅子王だつてついてるし。」

そうぶつぶつと呟いてから、障子が開いたままの自室に振り返った。

1代目大俱利伽羅が畳の上で寝っころがっている。組んだ両手を枕にして、天井を凝視していた。

「俱利伽羅、大丈夫かい？朝も昼も何も食べてないけど。」

「俺に構うな。」

1代目がそう言って光忠に背を向けた時、第2部隊の姿が遠く現れた。

「帰ってきた!!」

光忠が思わず立ち上がり、庭を駆け出した。1代目もあわてて体を起こし、裸足のまま庭へ飛び降りた。

「!？」

2代目が獅子王の肩に担がれているのが、1代目の目に映った。光忠の「どうしたんだっ!」という声が響いた。

……

「とにかく無事でよかったよ…」

手入部屋で眠る2代目大俱利伽羅の傍に座り、光忠がほつと息をついていた。1代目は怒って自室にこもっているようだ。

2代目の怪我は軽症ですみ、大したことはない。短刀達と獅子王が囲んで守ったおかげだ。

2代目は、出陣先でいざ索敵となったとたん、座り込んで動かなく

なつたと言う。

獅子王が光忠の横で言った。

「両腕を抱えるようにして、座り込んでしまつてね。目は見開いたままで、とにかく動かない。結局最後まで動けなかった。…彼の体の回りに鎖のような影が、一瞬見えたような気がする。」

「金縛りか？」

「かな。呪術か何かかけられたのかもしれない。」

「よりによつて、2代目にかけられるとはね。」

「初出陣だというのが、相手に知られたのかもな。でも、こんなことは初めてだったが。」

「迷惑かけたね。短刀君達もよく頑張ってくれたよ。」

「…前の記憶があるからね。」

獅子王の言葉に、光忠は首をかしげた。

「前の記憶？」

「前の2代目の記憶だよ。前の2代目は、短刀達に覆いかぶさつて自らの体を盾にしたんだそう。平野が、2代目の体に刀がぐさぐさと刺さる音が、まだ耳に残つてるって。」

「…そうだったのか。」

「今度は守つてあげることができたって、皆、喜んでいた。」

光忠は目を細めた。獅子王がぽんと光忠の肩に手を置いて、ゆつくりと立ち上がりながら言った。

「1代目に、あまり2代目を怒らないように言つてくれ。呪術かけられたとしたら、石切丸さんくらいしか解けないからってね。」

「ああ、ありがとう。獅子王。」

障子を開いた獅子王は、2本の指で光忠に敬礼して部屋を出た。

「光忠」

その声に、光忠は、はつと2代目を見下ろした。

「目が覚めたかい？大丈夫？痛いところはないか？」

「…ごめんさい。」

「僕は何もしてない。後で、獅子王と短刀達に礼を言つておいで。」

2代目がうなずいた。その幼い顔に、光忠は前の2代目の血だらけ

になった姿を思い出し、思わず目を背けた。

「記憶が…」

その2代目の眩きに、光忠は目を戻した。

「記憶？」

「索敵が始まったときに、急に目の前が真つ暗になって…。また明るくなったと思ったら、同じ顔をした俺が、短刀達の上に覆いかぶさって、やつらに次々に刺されてる姿が映って…。」

「！」

「体中が痛くて、息ができなくなつて…。光忠の「気を失うな」って声と、先輩の怒鳴り声と…それから…」

「もういいよ、2代目。記憶が戻ったんだね。」

「あれは、俺じゃない。」

「…え？」

2代目は、両手で顔を覆った。

「俺…何もできなかった。…腰抜けだ。」

「2代目…」

光忠は何も言葉が告げず、声を押し殺して泣く2代目をただ見つめていた。

……

「やつの性根が腐つてる証拠だ！」

光忠からすべてを知った1代目は、そう吐き捨てるように言った。

「そう言うなって、呪術はどうしようもないよ。」

「違う。呪術なんかかけられてるものか。やつらの記憶が戻って、怯えてしまったんだ。」

「…そうかもしれないが…」

それは、光忠も思っていたことだ。だが、1代目の前で、口に出せなかった。

1代目が吐き捨てるように言った。

「…やつぱり、やつを甦らせてはいけなかったんだ。もう2度と出陣には出せないだろう。そんなやつ、ここには無用だ。」

「ひどいことを言うね。」

「弱虫の大俱利伽羅なんて……！」

障子に人影が映っているのを見て、1代目が口をつぐんだ。光忠は1代目の視線の先を追って「あっ」と言った。

「2代目君！」

思わず立ち上がって、障子を開いた光忠に、1代目が「放っておけ！」と、どなった。

2代目の、廊下を駆け去る音だけが響いている。

……

2代目大俱利伽羅は、庭の隅に座り込み、自分の右手を見つめていた。

（あれは……俺じゃない……）

よみがえった記憶を思い出し、2代目はそう思った。

（俺には、あんなことできない。……でも、あの痛みは……確かに……）

その痛みを思い出し、2代目は目を閉じて一瞬空を仰ぎ、両腕で自分を抱えた。

「ここにいたのか。」

その声に2代目は振り返った。1代目大俱利伽羅が立っている。

2代目は、驚いて立ち上がった。

「先輩……」

「その呼び方やめろ。嫌な思い出しからないからな。」

1代目はそう言うと、2代目の肩に手を乗せ「座れ」と言った。2

代目はその場に両膝をついて、目を閉じた。

「ぼか、殴るんじゃない。さつきみたいに座れ。」

1代目は先に膝を立てて座りながら、自分の横を指差した。2代目はうなずいて、同じように座った。

「記憶が戻ったんだってな。」

「……でも……あれは、俺じゃない。」

「ん。残った刀身は、かけらだったからな。」

2代目は目を見開いて、1代目を見た。

「かけらの部分だけ、記憶として残ったんだろう。だけどそれ以外は、新しくできたお前自身だ。やっぱり、やつを丸々甦らせるなんての

は、無理だったんだよ。」

「…そう…か…」

何かほっとした表情をした2代目に、1代目が目を細めた。決して、他では見せない表情だ。しばらく、2人は沈黙した。鳥のさえずりだけが聞こえる。

「…これからどうする?…」

唐突に1代目が口を開いた。2代目はうつむいたまま目を見開き、すぐにまぶたを閉じた。

「壊して欲しい。1代目の手で。」

1代目は一瞬息を止め、自分も目を閉じた。

「…そうか…そうきたか。」

そう言つて、ゆっくりと立ち上がった。それを見た2代目も立ち上がり、1代目の背に言った。

「俺を…壊してくれ。」

「…やっぱり、殴っていいか?…」

「え?…」

次の瞬間には、2代目の体が吹っ飛んでいた。

「倶利伽羅っ!やめろっ!…」

いつの間になっていたのか、光忠が1代目の体を、背中から羽交い絞めにして押さえていた。

2代目は痛む頬を押さえながら、ゆっくりと起き上がった。

「簡単に、壊せとか言うなっ!!この馬鹿っ!…」

1代目が、光忠を必死に振り払おうとしながら怒鳴った。

「また、同じ思いを俺にさせるつもりかっ!!…」

「!…倶利伽羅…!…」

光忠の手が緩んだ。1代目は光忠を振り払い、起き上がっている2代目を押し倒した。1代目の涙が、2代目の頬にぽたぽたと落ちた。

「もう、俺の前からいなくなるな!俺の前で傷つくなっ!!…」

「先輩」

「その呼び方もやめろっつっただろっ!!倶利伽羅でいい!…」

2代目はただ目を見開いて、1代目の泣き顔を見つめている。

「頼むから…俺より先に死なないでくれ…」

1代目の嗚咽が響いた。光忠が微笑みながら、そつとその背に手を乗せた。

……

翌朝――

「俱利伽羅」

「なんだ？俱利伽羅。」

「今日は、いつ手合いしてくれるんだ？」

「それが、人にものを頼む態度か。」

「悪いか。」

「てんめえ〜」

第1部隊の宿舎の一室で、大俱利伽羅の兄弟喧嘩が始まった。

「朝っぱらから、なんなのー？庭でやってくれる？」

1代目と同室の光忠が、縁側でのびをしながら言った。1代目が2代目を振り払いながら言った。

「おうっ！外に出ろ！」

「望むところだ！お前が先に出ろ！」

「お前とはなんだお前とはっ！先輩にいう言葉かつ！その生意気な口はどの口…」

1代目が最後まで言わないうちに、2代目が笑いながら1代目のし掛かり、その両頬をひっぱった。

「いってて」

「わー！俱利伽羅のほっぺ柔らかい！結構伸びる！」

その2代目の言葉に、光忠は笑いながら振り返り、1代目の顔を覗き込んだ。

「あははははっ！俱利伽羅、かつこ悪い！」

1代目は顔を真っ赤にして、2代目を振り払うと庭へ飛び降りた。2代目が笑いながら、1代目を追いかけた。

光忠の笑い声が、辺りに響いている。

3代目「大俱利伽羅」

本丸 第1部隊の宿舎―

へし切長谷部が珍しく興奮した様子で、大俱利伽羅と光忠の部屋の障子をいきなり開いた。

「大変だ!」

あやとりをしていた大俱利伽羅と光忠は、驚いた表情で長谷部を見た。

「どうした長谷部?ちよつと今、手が離せないんだけど。」

光忠が言った。大俱利伽羅が「後じゃだめか?」と眉をしかめた。

長谷部は、息を整えながら言った。

「何で今、この状況であやとりしてるのかは敢えて聞かないが、とにかく大変なんだ!」

「なんだよ?」

「さっきの鍛刀で、3振り目の「大俱利伽羅」が出たんだ!」

光忠と大俱利伽羅は同時に「何だつて!?!」と声を上げた。

……

「今、主(あるじ)に挨拶してるところだ。」

長谷部はそう言つて、光忠の入れた湯飲みの茶を一気に飲み干した。

「3代目か。…えらいことだな。「大俱利伽羅」だけに。」

光忠が、長谷部の湯飲みに茶を注ぎ足しながら言った。1代目「大俱利伽羅」が、長谷部に尋ねた。

「それを、俱利伽羅…じゃない、2代目には言ったのか?」

「いや、まだだ。遠征に出てるからね。」

「あ?あいつ、今日遠征だったか!」

その1代目の言葉に、光忠があきれたように言った。

「俱利伽羅…忘れてたのか?かわいそうだろう。見送りもしなかったのか?」

「何で見送りなんてする必要がある。子どもじゃあるまいし。」

大俱利伽羅の言葉に、光忠は「はいはい」とあしらった。

長谷部が、苦笑しながら言った。

「帰ってきたら、2代目もびつくりだな。」

光忠が、興味深げに尋ねた。

「顔は見たのか？長谷部」

「ああ、とにかく目力（めぢから）が強い奴だった。」

「目力？」

「ん。1代目とは、また違う感じなんだが……。とにかく目つきがするどいんだ。」

長谷部が続きを説明しようとした時、障子に人影が映った。

「たのもー！ー！」

障子の外から、そんな声がした。

……

3代目「大俱利伽羅」は、長谷部の言うとおり、眼光の強い青年だった。今で言う「イケメン」タイプと言える。

「わー…彼女を紹介したくないタイプだな。」

光忠が、前で正座をしている3代目を見ながら言った。

「今時の青年って感じたが、さっきの「たのもー」はちよつとなあ。」

長谷部が腕を組みなおしながら、そう言って笑った。1代目はただ黙って、3代目をにらむように見つめている。

「先輩、どうぞよろしくお願いいたします。」

3代目がそう言って、頭を下げた。

「先輩は、やめろっ！」

1代目がいきなりそう怒鳴りつけた。3代目は「え？」と言って顔を上げた。

「ここでは「先輩」という言葉は禁句だ。訳は後で説明するよ。」

光忠が、優しく3代目に言った。3代目は不思議そうな表情をしながらも「すみません」と頭を下げた。

……

3代目は、長谷部と共に第2部隊の宿舎へ戻って行った。

「実直そうな青年じゃない。」

光忠が、少し不満気にしている1代目に言った。

「…納得できない。」

1代目の言葉に、光忠は首を傾げて「何が？」と言った。1代目は、その場にごろりと寝転びながら言った。

「あまりに普通すぎるんだ。やつが。」

「ああ「大俱利伽羅」らしくないってことだね。」

光忠が、苦笑しながら言った。1代目がうなずいた。

「確かに、腕には俱利伽羅文様があつたが…好青年過ぎる。」

その言葉を聞いた光忠が、思わず笑った。

「自分は、好青年じゃないって思ってるんだ！」

「言ってるんだが…「好青年」って言葉だけでも、虫唾が走るんだ。」

「あ、もしかして…俱利伽羅の嫌いなタイプ？」

「嫌いだ。大俱利伽羅じゃなかったら、関わりたくないところだが…。」

1代目は嘆息してから、言葉が続けた。

「そうはいかないだろうな。」

光忠は（こりや、またひと波乱起きそうだな）と予感した。

……

2代目「大俱利伽羅」は、第2部隊の宿舎の玄関を開き、後ろにいる短刀達に言った。

「お疲れ様、みんな。ゆつくり休むんだよ。」

2代目は、今は隊長として誰にも認められるくらいのレベルを持っていた。短刀達の信頼も厚い。

「隊長も、お疲れ様でした！」

短刀達が、2代目に一斉に頭を下げた。2代目は短刀達に手を振って、自室に向かった。

……

（疲れた。すぐに寝よう。）

2代目はそう思いながら、自室の障子を開いた。

「!?」

「?????」目の前に、自分と同じ格好をした男が寝っころがっている。

2代目が目を見開いたまま固まっていると、その男がゆっくりと起き上がって言った。

「なんだ。2代目は柔そうなやつだな。」

2代目は、今の自分の状況がつかめず、ただその男（3代目大俱利伽羅）を見つめたまま動けない。3代目は、すつくと立ち上がり、いきなり2代目に本体（刀身）を突きつけながら言った。

「俺が認める「大俱利伽羅」は1代目だけだ。決闘を申し付ける！」

……

第2宿舍の庭で、2代目「大俱利伽羅」と3代目「大俱利伽羅」はお互いの本体を構え、対峙していた。

（俺、疲れてるんだって……）

2代目は、そう心の中で嘆息しながら、3代目の送ってくる敵意の視線を受けていた。

（目力が半端ない。）

2代目は、そう思った。この時点でもう負けていることもわかってるが、あえてのんきな声を3代目にかけた。

「なあ、3代目。」

「なんだ？」

「俺が遠征帰りって知ってて、決闘を挑んでるんだよね？卑怯だと思わない？」

「どういう意味だ？」

「遠征って、まだ経験のない君にはわからないだろうけど、俺、結構疲れてんだよ。これでも。」

「それは、お前の鍛錬が足りないからだろう。」

「言うねー。」

のんきな答えとは裏腹に、2代目は何かが自分の中で弾けたのを感じた。

「じゃあ、遠慮なく受けて立たせてもらうよ。」

「そこなくっちゃな。」

2代目の目つきが変わったのを見て、3代目はにやりと笑った。

……

勢いよく振り下ろされた3代目の刀身を、2代目が強く弾いた。きいん、という音が辺りに響く。同時に、2代目が体をくるりと返して、上段から刀身を振り下ろした。それを3代目が弾き、真横に斬り付けたが、2代目が真上から叩きつけた。：それでも、3代目は刀を落とさず、再び振りかぶった。：が、そこから2人とも動かなくなつた。

(なんだこいつ…柔そうな顔して、結構強い!)

3代目は息が切れている。2代目も目の前が霞みかけていた。打ち合いが始まって20分経つ。お互い1分ですませようと思つていたが、そうはいかなかつた。

「この程度か!」

息を切らして動かない3代目に、2代目が言った。

「それ以上、手が上がらないんだろう。」

3代目は、刀身を握り直しながら答えた。

「まあね。後は、振り下ろすだけだからな!」

その言葉通り、振り下ろされた刀が2代目の肩に落ちた。

きいん!という音が辺りに響いた。

「!?」

「そこまで!」

2代目の肩を守つたのは、光忠の刀身だった。

「手合いは木刀でって、何度言ったらわかるのかなあ?」

そんなのんきな声と共に、大俱利伽羅達の刀身が、ほぼ同時に光忠に叩き落された。

……

3代目「大俱利伽羅」は、険しい表情の1代目と光忠の前で、正座をしてうなだれていた。2代目は、あぐらをかいた光忠の足を枕に寝入っている。1代目が口を開いた。

「恐ろしい奴だなお前。来て早々、決闘なんて法度(はつと)を犯しやがって。光忠が「手合い」ということにしてくれただから良かったもの…。2代目を壊すつもりだったのか?」

「…それくらいの気迫じゃないと、受けてもらえないと思つて…。」

1代目がその3代目の言葉を聞いて、くすつと笑った。光忠が驚いた表情で1代目を見た。

「俱利伽羅、今、笑った!?笑ったよね!」

「それがどうした?」

「いや、珍しいと思って:。」

「こいつが案外「大俱利伽羅」らしくて、ほつとしたんだ。」

それを聞いた3代目が顔を上げた。1代目は表情を引き締めて言った。

「2代目をどう思った?」

「え?」

「今、ガキみたいな顔して寝てるが:」

1代目がそう言つて、寝ている2代目の顔をちらと見て続けた。

「こいつの腕はどうだった。」

「:遠征帰りじゃなかったら:俺が壊されています。完全に。」

素直に認めた3代目の言葉に、光忠が嬉しそうに微笑んだ。1代目が、表情を崩さないまま言った。

「そうか。じゃあ、明日は俺とやってみるか?」

「!!遠慮します!」

「え?」

「すいません。俺、今ですら手の震えが止まらなくて:」

「はああ!」

1代目があきれたような声を上げた。光忠が、1代目の肩をひじで突いて言った。

「そりゃ、生まれてすぐにあんな長い間、刀身を握り締めてたらそんなだろう。俺達だって、最初の方の出陣の時、長丁場で手の震えが止まらなくて困ったじゃないか。」

「:」

1代目が黙り込んだ。光忠が3代目に向いて言った。

「3代目君、お咎めはここまでだ。第2部隊の宿舎に戻っていいよ。」

「はい。申し訳ありませんでした。」

3代目は丁寧な頭を下げてから立ち上がり、部屋を出て行った。

「…やっぱり、気に入らん。」

3代目の足音が消えてから、1代目が呟くように言った。

「うん。素直すぎるね。」

光忠が認めた。そして、まだ眠っている2代目の目にかかった前髪をよけながら言った。

「そう考えたら、この2代目の方が反骨精神が強いというか、大俱利伽羅らしいというか…」

その時、2代目が突然寝言を呟く。

「やだ光忠、何するんだよ。ふふっ。」

光忠が、驚いて目を見開いた。

「お前、どんな夢見てんだよっ!!」

1代目が立ち上がって叫んだ。

…

夜―

2代目は、第2部隊宿舍の縁側で寝転がり、煌々と輝く月を見ている。昼間寝すぎて、目が冴えてしまったのだ。自室には3代目が寝ている。同じ大俱利伽羅だということ、同室にさせられたのだ。

(決闘し合わせた奴と同室とはな。)

2代目はそう思い、苦笑した。2代目が1代目の部屋から戻った時、3代目は先に部屋にいた。

そして、2代目を見て一言「すまなかったな」と言っただけで、後はお互い口を利いていない。

(やつは猫をかぶってる。)

2代目はそう思っていた。実は、光忠の足を膝枕で寝た振りをしなから、3代目の様子を伺っていた。

(狡(こす)い大俱利伽羅か…。それも面白いな。)

そう思った時、足音が聞こえた。

「?」

2代目は半身を上げた。3代目が足元に立っていた。

…

2人の大俱利伽羅は、同じように縁側に座り、月を見上げていた。

しばらくお互い口を利かなかつたが、3代目がその沈黙を破った。
「さつき、1代目に明日の手合いを誘われたんだけど…」

2代目は（俺にはタメ口か）と、心の中で苦笑したが「ん」とだけ答えた。

「断った。」

「どうして?」

「怖いんだ。まだ右手が震えてて…」

「お前、決闘の時、ずっと刀を握り締めてただろう?」

「え?」

3代目は驚いた表情を2代目に向けた。2代目は月を見上げたまま言った。

「刀はずっと握り締めるもんじゃない。相手を斬る時だけ、握り締めるんだ。後は、落ちない程度に軽く握っていたらいい。」

「そうなのか?」

「ああ、そうじゃないと、いざという時に力が出なくなる。」

3代目は、驚いた表情のまま、震える右手を開いて見つめた。2代目が続けた。

「その震えは、怖いからじゃない。握り締め続けたせいで手が痙攣しているだけだ。明日には治る。」

「でも、駄目だ。」

「え?」

「1代目との手合い。…やっぱり怖い。」

2代目は苦笑して、初めて3代目の横顔を見た。切れ長のその目は、怖いと言いながらも目力が変わらない。

「じゃ、明日また俺とやるか?」

「え?」

3代目は、その目を見開き2代目に向けた。2代目は、再び月を見上げながら言った。

「決闘じゃないぞ。手合いだ。木刀で。」

「いいのか?」

「ああ、今日の決闘でお前の太刀筋は見切った。アドバイスできると

ころはしてやる。」

「…お前、顔で得してるな。」

「え?」

2代目は（損してるの間違いじゃないか?）と思いながら、3代目を見返した。

「俺、お前のこと、まじで柔い奴だと思った。」

3代目のその素直な言葉に、2代目は吹き出しながら答えた。

「ああ、よく言われる。」

「俺は、逆だ。そんなに強くないのに、強く見られる。」

「だから、強がってたわけか。」

「…そうだ。でも、ここでは、素でいられそうさ。」

「それでいい。」

3代目が、うなずいた

……

翌朝――

2代目の怒号が、第2部隊の庭に響いている。

「こら立て!…こんなことで、出陣は持たないぞ!」

芝生に四つんばいになって息を切らしている3代目は「ひえー」と小さく声を上げた。

「もう無理。」

「お前、出陣だったら、今の時点で首落とされてんぞ。」

「え?」

「出陣は、いつ終わるかわからない戦いだ。音（ね）を上げた方が負ける。」

「え? 時間制限ないの?」

「!?ないに決まってるだろう!」

「ゲームみたいに、鐘ならぬの?」

「出陣はゲームじゃないっ!!命がけだ!」

2代目はあきれながら、そう怒鳴りつけた。

「もう勘弁です。お代官さまー!」

3代目がそう言って、木刀を放って走り出した。

「どうしてお前は、いざと言う時にそうやって茶化す…こら！逃げるなっ！」

2代目も木刀を放り投げると、3代目を追いかけた。

…それを、木の陰から見ていた1代目がため息をついた。横にいる光忠も苦笑している。

「これは、しばらく2代目に任せておいた方がいいようだな。やっぱり、3代目は今時の子だ。」

1代目がうなずいた。だが、楽しそうに追っかけあいつこをしている2人を見ているうちに、1代目の体がうずき始めた。

「俱利伽羅？」

「行ってくる。」

「え？」

1代目が急に走り出した。そして「こらー！お前ら遊ぶなー！」と叫んでいる。

「!?1代目!？」

2代目3代目が驚いて、それぞれ振り返った。

「3代目逃げろ！捕まったら、くすぐりの刑に処される！」

「!!」

2代目の言葉に3代目は戦慄して、2代目とは反対に逃げ出した。

「お前ら卑怯だぞ！おい光忠！お前は3代目を追え！」

「え？何で僕まで？」

そう光忠は言ったが、1代目はもう2代目を追いかけて姿が見えない。

「やれやれ、やっぱり俱利伽羅は1人で十分だな。」

光忠はそう笑いながら呟いて、姿が見えなくなりかけている3代目に向かって走り出した。

3代目の憂鬱

本丸 第2部隊の宿舎―

3代目「大俱利伽羅」は、自室で気だるい体を横たえていた。目に拳を当て、ふーっと大きく息を吐いた。

(出陣が、あんなにきついものだなんて…)

正直、なめていた。命がけだということは、頭の中ではわかっていたつもりだ。だが…3代目の想像を超えていた。

(1代目も2代目も、あんなことを何度も繰り返して強くなったのか…。)

2代目に決闘を申し込んだ時、遠征帰りだと言っていたことを思い出した。恐らく、出陣も遠征も同じようなものなんだろう…と、今になって3代目は悟った。

(遠征帰りで…あれだけ動けた2代目は、化けもんだな。)

2代目に聞くと「1代目に結構しごかれたからね。」と笑っていた。実はまだ3代目は、1代目との手合いをしたことがない。してもらったことがないと言った方が的確だろう。

(怖い…どうして怖いんだ…)

初めて挨拶に行った時の、あの鋭い視線が今でも脳裏に焼きついてる。その後も毎日会っているし、笑顔も見たことがある。

それでも…未だに怖い。

3代目は再び、大きく息を吐いた。

…

「3代目が口を利かない?」

1代目「大俱利伽羅」が、自室に訪れた2代目の言葉に眉をしかめた。

「今日、初出陣だっただろう?何かあったのか?」

1代目のその問いに、2代目は首を振った。

「長谷部さんが隊長だったそうんだけど…特に何もなかったって。それどころか、初出陣にしては、なかなかの活躍だったぞってほめてただけだ…」

「長谷部がほめたんなら、よっぽどだ。結構、あいつ厳しいからな。」
「最初は、疲れて口が利けないのかと思ってたんだけど…何か様子がおかしいんだ。」

1代目は首を傾げて「ちよつと…顔を見てくるか。」と立ち上がった。

……

3代目は、突然の1代目の登場に体を固くしていた。きつちり正座をして、うつむいている。1代目は（確かに、いつものチャラさがないな）と思いながら言った。

「2代目から様子がおかしいと聞いてね…出陣で何かあったのか？」
「何もあります。ただ、役に立てたのかどうか、自分にはわからなくて。」

「長谷部からは、特に何も聞いていないよ。」

調子付かれては困るので、長谷部がほめていた…という事は敢えて言わなかった。元々、

少々意地の悪い性分なのだ。それでも3代目は、ほつとした表情を見せた。

「そうですか…。」

「お前自身は、出陣をどう思った？」

その1代目の言葉に、3代目は驚いた表情をした。1代目が首を傾げた。

「ん？なんだ？」

「いえ。そんなこと、聞かれるとは思わなかったの。」

「そうか。…で、どうなんだ？」

「…想像以上でした。頭ではわかっているつもりでしたが、あんなにきついものだとは思っていませんでした。」

「そうか。それがわかっただけでも、良かったんじゃないか？俺はてつきり、お前が「あんなの楽勝ー」とかいいながら帰ってくると思っていたからな。」

「……」

3代目がうつむき、黙り込んだ。1代目は思わず身を乗り出して、

3代目の肩をつかんだ。

「おいーまじでどうした？お前。」

しばらくの沈黙の後、3代目はうつむいたまま「俺にもわかりません。」と呟いた。

……

「いや、それが「大俱利伽羅」じゃないの？」

厨房で夕餉の支度をしながら言う光忠に、1代目は目を丸くした。光忠は、鍋の中を覗き込みながら言った。

「赤ちゃんが、大人になったって事じゃない？」

「そうかー？」

「逆に、ずっとチャライ3代目だったら、それこそおかしいんじゃない？」

「……」

「彼は今、成長期なんだよ。」

1代目は「そうなのかな」と呟いた。

……

「何もせず、しばらく様子を見よう。」

1代目にそう言われた2代目は、第2部隊の宿舎に戻りながら（気が重いな）と思った。

（1代目はいいよ、別室だから。俺は、ずっと3代目と一緒にいなきやなんないんだぞ。）

そう心の中で毒づきながら、2代目は自室の前で1つ息をついた。そして、そつと障子を開いた。3代目はいなかった。2代目は何か不安を感じ、庭の方へと向かった。

……

3代目は、池のほとりで煌々と輝く月を見上げていた。

（「あんなの楽勝ー」…か…）

1代目に言われた言葉を思い出し、苦笑した。

（そう思われても、仕方ないよな。）

そう思った時、胸がずきりと疼いた。

（なんだ？今の痛み…）

3代目は、胸に手を当てた。その時、再び疼き始めた。

(な…なんだこれ…)

疼きは大きくなっていく。そのうちに息苦しさを感じ始めた。

「あっ…」

その声を上げて胸を押さえ、その場にうずくまった。

「3代目!!」

2代目の声が聞こえた。3代目は、声のする方へと顔を向けた。

「2代目…」

そう言つて、手を伸ばしたつもりだった。が、その手が自分には見えない。

「2代目…俺…消…える…」

「俱利伽羅!」

2代目が、自分の体に覆いかぶさったのがわかった。…だが、意識がそこで途切れた。

……

翌朝—

2代目が、1代目の部屋で頭を抱えて座り込んでいた。1代目も光忠も、どうすればいいのかわからない。

「長谷部は、何してるんだ!」

1代目が、イライラしながら言った。

長谷部は主のパソコンで、同じような事象がなかったか調べているのである。システムのエラーかとも思われたが、その報告もない。

3代目が消えた時、他に消えた者がいないか各部屋に確認をさせたが、誰も消えていなかった。

2代目の脳裏に、苦しげに自分に手を伸ばす3代目の姿が甦った。

(もし、あいつとずっと一緒にいたら、助けてやれただろうか?)

頭を抱えたまま、2代目はそう思った。そして、はっと顔を上げた。

「本体…」

「え?」

2代目の呟きに、1代目と光忠が「あっ」と言った。…同時に、2代目は第2部隊の宿舎へ走り出していた。

……

「3代目!答えてくれ!刀身はどこだ!」

本来なら、神と刀身は一体化している。普段は見えないが、必要だと思つた時にだけ刀身は出現する。

そして破壊された後も、かけらだけが残ることがある。2代目はそのかけらで生まれたのだ。神だけが消えるというのはおかしい…と2代目は気づいた。

(刀身が見つかれば…)

2代目はそう思いながら、部屋中を探し回った。

(待てよ。3代目を最後に見たのは池のそばだった…!)

2代目は部屋を飛び出した。

……

2代目が池にたどり着いた時、池のほとりに石切丸が立っているのが見えた。

「!石切丸さん?」

2代目は、石切丸に駆け寄った。石切丸は柔らかな微笑を湛え、2代目に振り返った。

「…3代目大俱利伽羅君が消えたのはここだね。」

「!?…はい!…でもどうして…石切丸さん…」

石切丸は「しっ」と、指を自分の唇に当てた。

2代目は、口を閉じた。

「彼は、何かに悩んでいたかな?」

「えっ…はい。何を悩んでいたのかはわかりませんが。」

「…そうか。やっぱり「大俱利伽羅」なんだな。」

「え?」

ちよつと下がって…と石切丸に優しく言われ、2代目は素直に石切丸から離れた。

石切丸は肘を張り、両手をパンと音を立てて合わせ叫んだ。

「聞け、餓鬼ども!」

石切丸の体にオーラの炎が立ち上り、木々がざわめき始めた。(空気が変わった?)と、2代目は辺りを見渡した。さっきの穏やかさと

は違う険しい表情で、石切丸が叫んだ。

「その者は、邪（よこしま）な神にあらず！弱きものを援（たす）け、強き邪（じゃ）を祓うものなり！すぐにそのものを解き放て！」

強い風が吹いた。2代目は体を持っていかれそうになり、思わずその場に座り込んだが、石切丸はびくともしていない。

「ここを立ち去れ、餓鬼ども！お前達のいるべき場所は、深き地の底なり！」

その時、池の遥か上に刀身が現れた。

「大俱利伽羅！」

2代目が、それを見て思わず叫んだ。その時、1代目と光忠が駆け寄ってきていたが、池の上の刀身を見て立ち止まった。

「3代目の本体か？」

光忠が呟いた。1代目が「だろうな」とうなずいた。

「戻れ、地の底に！そのものを我に返せ！」

その石切丸の叫びと共に、刀身は光り輝き3代目の姿に変わった。何かに担がれているように、体が弓なりに反っている。

「くどいっ！直ちに返せっ！」

石切丸が刀身を抜き、真横に払った。

「俱利伽羅!!帰って来い！」

2代目が石切丸の前へ飛び出し、両手を差し出して叫んだ。すると、池の上の3代目の体が消え、大俱利伽羅の刀身が2代目の両手に現れた。

「!!」

「あ、落とすよ。」

「え?」

石切丸の、そんなのんきな声に2代目が振り返ったとたん、刀身が3代目の体が変わった。

「わっ！重っ！」

光忠と1代目が駆け寄り、2代目の体ごと3代目の体を支えた。

……

翌朝――

3代目は、ゆっくりと目を開いた。だが目が霞み、白い世界が広がっている。

「あっ！起きた!!」

そんな2代目の声があった。

「3代目、大丈夫か？」

1代目の声がある。だが、まだ目が見えない。

「俺…」

「石切丸さんに助けってもらったんだ。「餓鬼」っていうやつに、魂食われかけてたらしいよ。」

3代目は、2代目の声のする方を見た。2代目が自分の目の前で手を振っているのがわかった。

「あー…まだ、目見えてないかな。大丈夫。体が元に戻るまで、時間かかるって石切丸さん言ってたから。」

「そう…か…」

3代目の声が思うように出ていない。

「3代目」

その1代目の声に、3代目はぼんやりとする1代目の影に向いた。

「はい。」

「お前、そんなに悩んでいたのか。」

「……」

「餓鬼ってやつは、弱った魂を好んで食べるのだそうだ。繊細な「大倶利伽羅」らしいって、石切丸が言ってたが…。」

そこまで言っつて、1代目が2代目に向いた。

「俺達って、そんなに繊細なのか？」

「1代目は、逆に餓鬼を食べそうだけどね。」

「なんだと？」

3代目が力なく笑った。それを見た1代目が言った。

「お前、やっと笑ったな。」

「ほんとだ。」

1代目と2代目にそう言われ、3代目は照れくさそうに、また笑った。

「1代目」

「ん？なんだ。」

3代目の噎れた声に、1代目が身を乗り出した。

「…俺の体が元に戻ったら…手合い…お願いします。」

「ああ、わかった。びしびししごくからな。」

「えっと…いや…最初はお手柔らかに…」

その3代目の言葉に、2人が笑った。

そう言つて、また光忠が笑い出した。

「最初にやったのは誰だ？」

そう1代目が2人の大俱利伽羅に尋ねると、2人ともが手を上げた。

「はあっ!?!お前達が!？」

「2代目が、俺の背中に枕投げつけたから、なんか頭きて。」

「だって、昨日は3代目が皆の布団敷く係だったを忘れてたから、俺が代わりにやってやったのに礼も言わないから…」

「だから、悪かったっていったじゃないか！」

「その謝る態度が、気に入らないってんだよ！」

「じゃあ、どう謝ればいいんだよ!しつこいなっ！」

「おいおい!1代目がそろそろキレるぞ君達。」

光忠のその言葉に、2人の大俱利伽羅は、はっと1代目を見た。1代目の体から湯気のようなものがゆらゆらとゆらいでいる。

「2人とも表でろっ!!」

その怒鳴り声と共に、2人の大俱利伽羅は正座のまま飛び上がった。

……

「あー…きつかったー…」

2代目が思わず呟いた。手合いの後、2代目と3代目は自室で倒れこんでいた。

「1代目のあのバイタリテイはどこからくるんだー?俺達の方が体若いはずなのに、ついてけない…」

3代目は、体をあおむけに返しながら目に拳を当てた。2代目がうなずいて答えた。

「出陣の回数の違いかねえ。」

「ごこしばらく、また出陣なくなつたよな。」

「ん。最近誰かしら、傷ついて帰ってくるから、主が嫌がつてるんだつてさ。長谷部さんが言つてた。」

「主が優しいのはいいが…俺達、ほんとにこんなことしていいのかな。歴史修正者とやらは、まだいるんだろう?」

3代目が、うつぶせのままの2代目に向いて言った。

「ん。なんでも、この他にもいろんな主がいて、それぞれが戦ってるらしいんだけど…。合わさることがないんだって。」

「んー…よく意味わかんない。」

「俺も、わかんない。つてか、今、何も考えたくない。」

「…だな…。」

2人はそう言うと、同じように目を閉じた。

……

「朝の第2部隊の枕投げの話の主にしたら、大笑いしてたよ。自分も混じりたかったってさ。」

長谷部が、光忠の部屋でニコニコしながら言った。常に主第一の彼には、うれしい事だったようだ。

「そうか。」

光忠も思い出して、吹き出した。1代目は横で寝転がっているが、ただ黙っている。

光忠が、そんな1代目ををちらと見てから言った。

「俱利伽羅、最初、皆が酒を飲んでしまったのかと思ったんだって。」

「ははっ。そりゃ、第1部隊の宴会じゃないか。」

「そう。宴会の後、皆酔っ払って倒れている姿に似てたらしい。」

「だが周りに散らばってるのが、酒瓶じゃなくて枕だったってわけだな。」

「それ、見たかったなー。俺だったら、絶対に写真撮っとくのにな。」

1代目はむすつとした様子で起き上がり、部屋を出て行った。長谷部が、黙って見送りながら、光忠に尋ねた。

「？俱利伽羅はどうして、あんなに怒ってるんだ？」

「最近、1、2部隊とも出陣も遠征もないだろう。体がなまってるんだってさ。このままじゃ、この本丸全員がなまくらになっちゃってしまっうって、昨夜、悩んでた。」

「戦う体なんだな、やつは。」

「2代目、3代目にはないけどな。」

「しかし、平和主義者の主に、また出陣させてくれって言いにくい

なあ。」

「そうだなあ。」

光忠はそう苦笑してから、思い出したように言った。

「ああ、そうだ。そろそろ第3部隊の宿舎ができるって聞いたけど。」
「ん、ほほできてるよ。3振り目達がそっちにうつれば、2振り目達もゆつくりできるようになるだろう。」

「じゃあ、もう枕投げ大会はできないってわけか。」

「そりゃ、さびしい事だな。」

長谷部がそう言い、光忠が「確かに」と言って笑った。

……

第3部隊の宿舎が出来上がった。新しい家の香りに3代目は「お
おー」と自室の障子を開きながら、感嘆の声をもらした。

「ここ、俺1人で使えるのか。：1代目すら、光忠と同室なのにいいの
かな。」

そう呟いて、新しい畳の上にあおむけに寝転んだ。

(…いいのかな。本当にこんなことしてて…)

3代目はふとそう思った。

(俺達は戦うために、甦らされたんじゃないのか?)

そう思い、思わず首を横に向け「なあ、2代目」と言った。

横には誰もいない。

「そうか…1人だったな。」

ふと寂しさを感じた。

……

夜 第2部隊の宿舎―

2代目「大俱利伽羅」の部屋に、2代目の「今剣(いまのつるぎ)」
が、枕を持って入ってきた。

布団にもぐっていた「大俱利伽羅」は、驚いて飛び起きた。

「どうした?枕持って?」

「寂しいんです。」

「え?」

「いつも3代目(今剣)と一緒に寝てたのに…1人になったから。」

「ああ…。そうか。なるほどな。」

実は、大俱利伽羅もそう思っていた。

「おいで、一緒に寝よう。俺も寂しかったところだ。」

「ほんと!？」

「ん。入れ。」

今剣は、うれしそうに大俱利伽羅の布団にもぐりこんできた。

しばらくしてから、今剣が大俱利伽羅の顔を見上げていった。

「今、3代目達どうしてるかなあ。」

「そうだな。うちの3代目は、寝言言いながら寝てるよ。」

「寝言言うの?」

「うん。おかしいぜー。この前はいきなり「もつと食わせろー!」って

叫んだんだ。」

今剣が笑った。

「叫んだの?」

「ああ、でも寝てるんだ。その後に「もう無理。勘弁して。」だって。」

「どんな夢なんだろうね。」

「大方、1代目に無理やりまんじゅうでも口に押し込められたんじゃないか?」

「あははっ!」

心地よい声で今剣が笑った。そのあどけない顔を見た大俱利伽羅は、ふと（これでいいんだな）と思った。…実は2代目も3代目と同じ事を考えていた。戦う付喪神として甦ったのに、これでいいのかと。

（こいつらに、戦いは似合わない。）

今剣が、急に真顔になった大俱利伽羅を見て「どうしたの?」と言った。

「いや、なんでもない。寝よう。明日は畑仕事の当番だったろう?」

「あっうん。」

「寝坊したら、またうちの1代目の大目玉くらうからな。」

今剣が、また笑った。

……

翌朝――

1代目3代目「大俱利伽羅」は、2代目の言葉に目を見開いていた。「俺、長谷部さんに言つて、主に頼んでもらおうと思うんだ。」

「大俱利伽羅部隊か。いいかもな。」

1代目が目を輝かせている。3代目が「でも」と言った。

「主、いいつて言うかな…。ただでさえ、出陣嫌がつてるのに。」

「戦うのは俺達だけでいい…。そう思ったんだ。」
「？」

「短刀達はどう思ってるかわからないが、俺は、あいつらを危険にさらしたくない。短刀を除いたら打刀でさえまだ1振り目しかない中で、俺達「大俱利伽羅」だけが3人いる。」

「2代目、お前成長したなあ。」

1代目が感心したように言った。3代目も嬉しそうにうなずいている。
「俺も賛成だ。」

「よし！さっそく長谷部に頼みに行こう。」

3人は揃って立ち上がった。

……

長谷部は最初渋っていたが、大俱利伽羅達の熱意に負け、結局主の部屋に3人を通した。

そして…。

主も3人の大俱利伽羅の熱意に負け「大俱利伽羅部隊」が誕生することになった。

「よし！早速、作戦会議だ！」

1番はりきっているのは、1代目だった。2、3代目は顔を見合わせて笑った。

……

2代目は、第2部隊の宿舎の縁側で体を横たえ、満天の星空を眺めている。

(明日、早速出陣か。…吉と出るか、凶と出るか…)

一瞬、死が2代目の頭をよぎった。

(俺らが強いといっても…3人だけで本当に大丈夫なものか…)

レベル云々の問題じゃない。それに相手が何人かわからないし、何が出てくるかもわからない。今更ながら恐怖を感じて、2代目はぶるっと体を震わせた。

(武者震いだ武者震い。怖いんじゃない。)

そう思いながら起き上がったとき、今剣と前田、平野が枕を持って現れた。2代目は思わず吹き出して「どうした?」と言った。

「明日…大俱利伽羅さん達だけで、出陣って聞いて…」
「ん。」

「無事に帰ってきて下さい。僕ら、本当は一緒に戦いたいけど…長谷部さんが駄目って。」

2代目は目を見開いた。

「長谷部さんに、何を言ったの?」

「僕達もお供させて欲しいって言ったんです。でも、大俱利伽羅じゃないから駄目だって言われました。」

2代目は胸を突かれる思いがした。短刀達も、本当は戦う体なのだ。

「前の2代目みたいになっちゃわなにかって…皆、心配してて…」

「そうか…。ありがとう。でも、強い1代目もいるし、3代目もいる。大丈夫だ。」

短刀1人1人の頭をなでながら、2代目が言った。

「枕を持ってるって事は、俺と一緒に寝るつもりだったのかい?それとも、枕投げするつもりかい?」

2代目が笑いながらそう言うと、短刀達が顔を見合わせて笑った。

「大俱利伽羅さんと、一緒に寝るため。」

「そうか。しかし、4人一緒に寝られないぞ。ああ、そうだ。」

2代目は敷いてある布団に近寄り、向きを変えた。

「こうやって横にしたら、皆で寝られるな。」

短刀達が笑いながら、大俱利伽羅の傍に来た。前田が「大俱利伽羅さん、足出ちやうよ」と笑った。

「構わない。さあ、皆で寝よう。」

「はい！」

3人の短刀達が嬉しそうに返事をした。

……

翌日――

光忠が縁側で大きくため息をついている。

「大丈夫かなあ……俱利伽羅達……」

その隣で、長谷部も同じようにため息をついた。

「そうだな……。いくら奴等が強いとはいえ、3人だけでは無謀だったかもしれない。今更だが。」

その時、短刀達の悲鳴のような声が聞こえた。それぞれが「大俱利伽羅さんっ！」と叫んでいる。

「!!……あいつら……まさか!」

光忠が駆け出した、長谷部も後を追った。

……

手入部屋では、大俱利伽羅3人共が入っていた。それぞれの部屋の前で、短刀達が涙を拭っている。1、2代目が中傷、3代目が重傷だった。3人とも刀装兵を連れていかなかった事も、今になって光忠は知った。

(慢心のためか……刀装兵にも、情をかけたのか。)

後者だな……と、光忠は思った。

「まだ動いちや駄目です!」

そんな声が聞こえたとき、1代目「大俱利伽羅」が四つんばいになって、ふすまを開いた。顔がかなりゆがんでいる。右肩から、左脇にかけて包帯が巻かれており、血がにじんでいる。短刀達があわてて、1代目を止めようとした。光忠が「大丈夫。僕に任せて。」と短刀達を避けさせ、立ち上がろうとする1代目の体を支えた。

「俱利伽羅!ばかっ!動いちや駄目だ!」

「3代目はどうだ?あいつ……俺、かばって……」

「え?」

「背中からやられた。援けようとした2代目は、かなりの数に囲まれて……」

そこまで言って顔をしかめた1代目に「部屋へ戻れ！」と光忠は怒鳴りつけた。

「そうやってお前が動いたところで、2代目達が治るわけじゃないだろうー！」

「…ああ…ああ、そうだな…」

1代目はその場に伏した。

「俱利伽羅ー！」

短刀達が、1代目を取り囲み声を上げて泣き出した。

……

2代目は意識は戻したものの、体を動かすことができない状態だった。

「大俱利伽羅さん」

2代目の短刀達が、それぞれ2代目「大俱利伽羅」の手を握っている。

大俱利伽羅が微笑みながら、短刀達に言った。

「大丈夫だ。まだ動けないだけだよ。すぐ治る。」

短刀達が、それぞれ目を拭いながらうなずいた。

「3代目は、どんな様子？」

「手入は無事に済んだのですが、まだ目を覚まさないって。」

「命に別状はないんだね。ならよかった。1代目は？」

「1番に目を覚ましましたが、まだ治らないのに何度も起き上がろうとして、光忠さんに怒られています。」

2代目は力なく笑った。

「1代目らしいな。」

「大俱利伽羅さん。」

平野が2代目に体を乗り出した。

「ん？」

「もう…3人だけで出陣に出ないで下さい。長谷部さんから聞いたんです。僕達に戦わせないために、3人だけで行ったって。」

「また余計な事を…」

2代目がそう言って、苦笑した。

「僕達、足手まといですか？」

「え？」

思わぬ前田の言葉に、2代目は目を見開いた。

「足手まといになるから、連れて行ってくれなかったのですか？」

「いや、そんなつもりは……」

「僕達も、付喪神です。戦うために生まれたんです。もっと鍛錬して強くなるから……」

前田はそこまで言って、涙をこぼした。

「今度は、一緒に行かせて下さい！」

今剣と平野が、前田の言葉にうなずきながら泣き出した。

「いや、その……泣かないで……」

2代目はそう言って体を上げ「あつ」と顔をしかめた。

「大俱利伽羅さん！」

短刀達が驚いて、2代目の体を押さえた。

……

「俺の慢心だったんだな。」

1代目「大俱利伽羅」が呟いた。床の横に座っている光忠が「そういうことだ」と言った。

「でも、君だけじゃない。2代目3代目の慢心もある。」

「ああ。本当は、俺が止めなきやならなかったんだろうな。」

「俱利伽羅……」

「それを、俺までがガキみたいに喜んで、奴らを危険な目に晒して……何様だろうな。俺。」

「だが、それも「大俱利伽羅」だよ。お前らしくないと言えば、嘘になる。」

「光忠……」

「主も長谷部も、自分達を責めていた。前の2代目のようなことはない」と決めていたのに、結局同じ事を繰り返してしまったって。」

「……」

1代目は、目に拳を当てた。涙が頬を伝っている。

……

1カ月後―

新しい第3部隊の宿舎で、短刀達の楽しそうな笑い声が響いていた。

「これでもくらえっ!!」

3代目「大俱利伽羅」が、2代目を狙って枕を投げつけた。2代目は見事に枕を抱きとめ、それを3代目に投げ返した。あまりの素早い反応に、3代目は顔面で枕を受け止めてしまい、その場にひっくり返った。

短刀達の笑い声がした。

「3代目さん、大丈夫!？」

ひっくり返ったまま動かない3代目に、短刀達が不安を感じ始め、ぞろぞろと3代目に近寄った。2代目も不安になって「おい」と、3代目の腕をつかんだ。

「な――んてな!」

3代目はそう言って飛び起きると、2代目の顔に枕を投げつけた。今度は2代目がひっくり返った。

「卑怯だぞ!3代目!」

「戦いに卑怯も何もない!勝つことが正義だっ!」

「お前の辞書に、スポーツマンシップって言葉はないのか!」

「ないね!」

「このやろ―!」

2代目が3代目に素手でつかみ掛かった。3代目が笑いながら、それに応じる。…だが、肩をつかまれたとたん、顔をしかめた。

「!...3代目!」

2代目が、はっとして手を離そうとした。3代目はすぐに表情を戻し、その手を掴んで小声で言った。

「大丈夫。短刀達が不安がるから続けろ。」

「...ああ...」

2代目は、戦法を変えることにした。

「1代目大俱利伽羅直伝っ!くすぐりの刑だっ!」
そう言って、3代目の両脇に手をもぐらせた。

「あっぱかつ！やめろっ！」

3代目が体をよじって、2代目から逃れようとした。

「そこ一番弱いんだっ！って言っちゃったよ、俺ってばかだっ!!」

その3代目の声に、短刀達が大笑いした。

∴一方、第1部隊の宿舎では∴

酒瓶の散らかる中で、1代目大俱利伽羅始め、光忠、長谷部を含む全員が倒れている。

「んーもう飲めなーい∴」

大俱利伽羅のそんな声が、宿舎中に響いた。

〈閑話休題〉 大俱利伽羅と乱藤四郎

本丸 第1部隊の庭―

「鬼ごっこするぞ!」

1代目「大俱利伽羅」のその言葉に、2、3代目は「は?」と言った。

「1代目、今日は鍛錬するって。」

「だから、鍛錬だ。本気で鬼ごっこなんてしたことないだろう。今まで。」

「本気で鬼ごっこ?」

「そうだ。死ぬ気でやってみたら、これが結構きついんだ。いい鍛錬になる。」

3代目が、ぞっとしたような表情をした。

「死ぬ気って?」

「もちろん、殺し合いじゃない。捕まった奴に罰を与えるんだ。あるいは、捕まえられなかった鬼にね。」

「どんな罰?」

2代目のその問いに、1代目はにやりと笑って言った。

「女装」してもらおう。」

……しばしの沈黙……

「はあああああっ!」

2、3代目が同時に声を上げた。1代目が真面目な表情で言った。

「負けた奴が「女装」だ。」

すると、3代目が「あ、楽勝」と言った。1、2代目は「え?」と3代目を見た。

「草刈りなら、俺得意です。」

「それは「除草」だっ!何を、現実逃避してるんだお前は!」

1代目が怒鳴りつけた。2代目が頭を抱えながら言った。

「うわー…女装なんて、死んだほうがましだっ!」

「お、2代目、よく言った。それが聞きたかった。」

1代目が、そう言って笑った。3代目が尋ねた。

「もちろん、1代目も入るんですよね？」

「当たり前だ。2人きりでやらせて何になる？」

1代目が、笑いながら答えた。2代目が眉をしかめ「1代目の女装？」と呟いた。

しばしの沈黙の後、2、3代目が、同時に言った。

「見たくないような見たいような…」

「なんで、俺が負ける体（てい）なんだっ！」

1代目が怒鳴った。

……

数時間後―

大俱利伽羅3人共が、芝生に寝っころがり息を切らしていた。

「なんだ、結構スタミナだねーなお前ら。」

1代目が、ゆっくり起き上がりながら言った。2代目が寝転がったまま、両手で顔を塞いで言った。

「うわー俺が女装かああああ！」

「大丈夫。お前なら似合う。」

3代目のその言葉に、2代目は「それ、褒めてない！」と言い返した。

1代目がにやにやしながら、2代目を見下ろして言った。

「絶対、やつてもらおうからな。明日にでも乱（みだれ）んところ行け。」

乱とは、短刀「乱籐四郎」の事だ。常に少女姿でいる異色の付喪神だ。

「えっ!? 1代目本気!？」

「だから本気だって言ってるだろう! 今度の第1部隊の宴会で披露してもらおう。」

「……………」

絶句している2代目の横で、3代目が突然飛び起きて言った。

「乱んところ行くの!?! 俺も行く!」

「えっ!」

……何か、違う空気が流れた。

……

翌日―

「だから、なんでお前まで来るんだよ？」

第1部隊宿舎の廊下を歩きながら、2代目はついてきた3代目に言った。

「乱ちゃんに会いに。」

「乱：ちちゃん？」

「初めて見た時、ジョークで口説いたんだ。」

「はああああつ!?それでっ!?」

「ノリがよくて面白かったよ。」

「ノリがいい？」

2人の前の障子が、いきなり開いた。

「うるさいわねえ。何を人の部屋の前で：きやあ！3代目君！お久しぶりー！」

少女姿の乱が3代目に抱きついた。3代目も自然に抱きしめている。2代目が驚いて、2人を交互に見た。

「おはよう、乱ちゃん。今日も可愛いよ！」

「やあねえ3代目君、いつも口がうまいんだから。」

「うまくないよ。ほんとだだって乱ちゃん、一番ここで可愛いよ！」

「もおやだあ！3代目も一番、かっこいいよお！」

乱は、3代目の腕にぐりぐりと人差し指を押し付けている。：ついていけない2代目が後ずさりした。乱が、やっとその2代目に気づいた。

「あら、倶利伽羅2代目君連れてどうしたの？」

3代目が、乱を見下ろしながら言った。

「それが、冗談抜きで助けて欲しいんだ。」

「冗談抜きで助ける？」

「うん。大変なことになつてさ。」

乱は、いきなり3代目を突き放した。3代目は気にしない様子である。

「なんだ、それを早く言えよ。まあ、中へ入れ。」

突然の乱の変わりぶりに、2代目が、さらにずりずりと後ずさりし

ている。

3代目が振り返ると2代目の姿がない。見ると、2代目は遠くの柱にしがみついていた。

「おい！2代目！なんでそんなに遠くに離れてるんだ！お前が主役だろうが！」

2代目は、首を振った。

「おい！早く来い！これでも、氣い短いんだ!!」

乱にそう怒鳴りつけられ、2代目が、慌てて駆け寄ってきた。

……

第1部隊の宴会は、またいずれ（あるのか？（＾＾；））

闇落ち

ジャージ姿で、第1部隊宿舎の庭に寝転がっている3代目「大俱利伽羅」は、膝枕をしている1代目「乱（みだれ）籐四郎」といちゃついている。

「首しんどくない？俱利伽羅。」

「ん？寝心地いいよ。お前こそ足痛くないか？」

「うん。大丈夫！」

「そう。なら良かった。」

「疲れとれた？昨日の遠征きつかったって、聞いたけど。」

「…ん、昨日の遠征は確かにきつかったけど、大丈夫だよ。よく寝られたから。」

「なら、いいけど。…俱利伽羅、こうやって上から見下ろすのって初めてだけど、可愛い顔してるね！」

「ははは、可愛いってお前の方が可愛いよ。」

「やあねえ、もおっ！」

「何照れてるんだよ。」

「本当にそう思ってるのお？」

「思ってるって！じゃなかったら、こうやってお前にわざわざ会いに来ないよ。」

「他にも、可愛い子はいるのにい？」

「確かにそうだな。」

「!!」

「!いたた!髪の毛引っ張るなよ！」

「だつてえ！」

「光忠だったらキレてるぞ…お、そのふてくされた顔も可愛いな。」
「知らないっ！」

「こらこら膨らましたままだったら、ほっぺが戻らなくなるぞ。…あははーお前のほっぺ柔らかいなあ…」

「お楽しみのところ、すまないが。」

その声に、2人はやっと傍にいる男に気づいた。

声をかけたのは、目元の涼しい、優しい顔つきの青年だった。大倶利伽羅も乱も初めて見る顔だ。青年は笑顔もなく、どちらかというとな愛想に2人に尋ねた。

「第1部隊の宿舎へは、どう行けばいいか教えて欲しい。」

「ああ、それなら。」

大倶利伽羅が、乱の膝から起き上がりながら言った。

「このまま、真っ直ぐ行けばいいよ。あっち、ちよつと木が生い茂ってるだろう?」

「ああ」

「そこまで行けば、宿舎が見える。そこが第1部隊の宿舎だ。」

「ありがとう。邪魔して悪かったな。」

青年はニコリともせずにな言いな、大倶利伽羅が教えた方向へ歩いていった。

「……」

2人は、青年の後姿が木々に隠れるまで、黙って見ていた。

「なあ、倶利伽羅」

乱が、男言葉に戻って言った。

「なんだ?」

「僕、あの武装、見たことあるんだけど。」

「俺も。」

「腕の文様も、見たことある。」

「確かに文様あったな。」

大倶利伽羅はそう言って再び体を倒し、乱の膝に頭を乗せたが…

「!4代目っ!」

乱と同時に叫んで、飛び起きた。

……

「お前ら、恋人ごっこもいい加減にしないと、まじで変な噂立つぞ。」

2代目「大倶利伽羅」があきれ顔で、息を切らして自分の前にいる

3代目「大倶利伽羅」に言った。

「いや…それよりもさ…4代目だ。あれまじで4代目の大倶利伽羅だ。」

「確かに文様はあったのか？」

「あつた！」

2代目は、目に手を当てながら言った。

「なんで、また「大俱利伽羅」なんだー。世間には、大俱利伽羅がなか出なくて、下手な小説書いてる奴もいるつてのに。」（天の声：えーっつと…）

「第1部隊の宿舎に向かって行ったから、今頃、1代目に挨拶してるはずだ。」

「どんな奴だった？」

「なんとなく優しい顔だちなんだが、無愛想だった。よけいな口は利かないってタイプだな。」

「ふーん。「大俱利伽羅」らしいと言えば「大俱利伽羅」らしいな。」

2代目がそう言った時、障子の外から「大俱利伽羅さん、1代目が宿舎にお呼びです。」という短刀の声が出た。

……

2代目「大俱利伽羅」は、4代目の顔を見たとき「へえ」と思わず呟いた。

その涼しげな目元は、何かぞくりとするような冷たい光を湛えている。

（3代目とはまた違う、目で殺すタイプだな。）

2代目は、そう思った。

「こっちが2代目だ。そして、こっちが3代目」

1代目「大俱利伽羅」が、2代目と3代目に順に手を向けた。2代目は「よろしくお願ひします。」と頭を下げた。その後、3代目は笑顔で「さつきは失礼しました。」と言いなから頭を下げた。

4代目は笑顔もなく「いえ」と言ってから、頭を下げた。1代目が不思議そうに尋ねた。

「なんだ、先に会っていたのか？3代目。」

「あ、いえ。ここに来る道を聞かれたんです。」

「そうか。」

1代目はそう言うってから、4代目に向いた。

「君の宿舎は第3部隊の方だ。この3代目と同室になる。」

3代目はそうなることは予感していたので、驚くこともなく「よろしく」と再び頭を下げた。4代目も無表情で「こちらこそ」と頭を下げた。

……

3代目は、ふと夜中に目を覚ました。

寝返りをうち障子に向くと、隣の床で寝ているはずの4代目がいな

い。

「？」

よく見ると、障子に4代目らしき影が映っている。

3代目は床から出て、そっと障子を開いた。

4代目は、輝く月を見上げていた。片膝を立てて縁側に座り、そのまま動かない。

「寝られないのか？」

3代目がそう尋ねると、はっとしてこちらを見た。

「起こしたか。」

「いや、勝手に目が覚めたただけだけど：明日は、朝早くから1代目との手合いだろ？体横にしといた方がいいぞ。別に眠らなくていいからさ。」

「：強そうだな。1代目。」

「ああ。」

3代目は、4代目から少し離れて座りながら言った。

「2代目も半端ないぞ。ああ見えて。」

「へえ。楽しみだ。」

その4代目の返答を聞いた3代目は（恐くないんだ。こいつ）と、内心驚いた。

4代目が、少しうつむき加減に言った。

「俺はどう見える？」

「え？」

「：いや：強そうか、柔そうか。」

3代目は、しばらく考えてから答えた。

「正直…つかみきれない。どつちにも、見える。」

4代目は、ちらと3代目に流し目を送り、口の端を少し上げて「そうか」と言った。

それを見た3代目は、ぞくりと背中に悪寒が走ったのを感じた。
(俺、こいつに勝てないかも！)

そう思った。

……

翌朝――

4代目は、1代目に打ちひしがれていた。芝生に叩きつけられ、木刀をつきつける1代目を上目遣いに見た。1代目が言った。

「……までか？」

「…参りました。」

4代目は、顔をそむけて言った。いつもなら「人の目を見て話せ！」と怒る1代目だが、この時はなぜか「そうか」と言っただけで、木刀を引っ込めた。2代目3代目は驚いたが、ただ黙っている。1代目が微笑んで言った。

「いい腕だ。感心したよ。」

4代目は、上目遣いに1代目を睨み付けた。1代目は気にしない様子で「今日はこれまでだ。」と言って、木刀を持ち直し、宿舎に帰って行った。

4代目は、1代目の背を見えなくなるまで睨み続けている。

「…4代目…」

3代目が恐る恐る声をかけた。2代目は腕を組んで、ただ黙っている。

4代目は「馬鹿にしやがって」と呟き、その場に木刀を叩きつけた。

「どうせ…俺は…」

4代目はそう呟いてから、はっと、2代目と3代目のいる方へ顔を向けた。…が、何も言わず木刀を持って立ち上がり、1代目とは反対方向へ歩き出した。

「4代目！」

3代目が追おうとした。それを2代目が手を伸ばして止めた。

「しばらく独りにしてやれ。」

「え?」

「構うな。いいな。」

2代目はそう言うと、自分の宿舎へと向かって歩き出した。

……

(構うなっただって…)

3代目は、自室で立てた両膝に顔をうずめて座っている4代目を横目で見た。

(真横で、こんな姿見せられて…構わないわけにはいかないだろう?)
そう思いながら黙っていると、4代目が突然顔を上げた。

「3代目」

「はっはいっ!?!」

思わず、3代目は声を裏返して答えた。4代目が3代目をじつと見つめながら言った。

「俺…贋作(レプリカ)なんだ。」

3代目の思考が止まった。

……

2代目は、見開いた目で3代目を見た。3代目は、2代目の前で珍しく正座している。

「前の主(あるじ)の記憶がないって?」

「そうだ。全くないそうだ。」

「じゃあ、光忠の事も?」

「ないんだそうだ。で、それを1代目が気づいてるって言うんだ。」

2代目は眉をしかめた。

「どうしてそう思うんだ?」

「自分の無礼にも怒らなかつたから、レプリカなんてどうでもいいんだらうって…」

「1代目は、そんな人じゃないだらう!」

「俺もそう言ったさ。でも首を振るばかりで、後は拉致があかなくて…。」

3代目が困り果てた様子で、目に手を当てた。2代目が沈黙の後、

眩くように言った。

「レプリカか…でも、それを言いだしたら俺達だって、わからないんじゃないか?」

「俺達は、政宗様の記憶があるじゃないか。」

「まあ、そうだけど。でも、仮に4代目がレプリカだったとしても、俺は気にならないけどなあ。「大俱利伽羅」には違いainんだから。」

3代目がうなずいた。再び2人は沈黙した。3代目がふと顔を上げて言った。

「…1代目に伝えた方がいいと思うか?」

2代目が、腕を組んで黙り込んだ。

……

結局、1代目には黙っておこうということになった。

(重い重ー。)

自分の宿舎に向かいながら、3代目はため息をついた。

戻れば、またあの落ち込んでいる4代目と一緒にいなければならぬい。

「あー…どうすればいいんだー?」

そう言いながら宿舎の空を仰いだ3代目は、目を見張った。

「!?…なんだ!?空の色が…!」

真紫の空が広がっていた。3代目は後ろを振り返って、第2宿舎の方の空を見た。

普通の青空だ。

だが、第3宿舎に向かうにつれ、紫に変色している。

(雨空とは何か違う…!)

3代目は、宿舎に向かって走り出した。

……

「おい!誰もいないのか!!」

3代目は部屋という部屋の障子を開け放ちながら、走り回っていた。いつもいるはずの短刀達がいなかった。

「皆、どこに行ったんだ!」

「皆、どこに行ったんだ!」

そう叫んでから、自室に向かった。

「4代目いるか!？」

障子を開け放つと、3代目は体を硬直させた。

4代目が立っていた。その体から、紫色のオーラの炎がゆらゆらと揺れている。

(!…:闇落ちか!)

4代目が、紫色の瞳で3代目を見た。3代目は思わず、目を背けた。

(目を見たらだめだ!俺まで…)

3代目はとっさに思った。

そして体を反し、庭に飛び降りた。

(石切丸さんに!…:…)

そう思つて前を向いたとたん、ぎくりとして足を止めた。

3振り目、4振り目を合わせた大勢の短刀達が、4代目と同じ瞳で自分を見ている。

「お前たちまで…」

そう呟き、とっさに刀身を出現させた。だが、鞘から抜くことなく、ただ握り締めた。

(斬るわけにはいかない!どうしたらいいんだ!)

そう思った時、短刀達が同時に、刀身を鞘から抜いた。

「!!」

「お前の本体をこちらに。」

その声に、3代目は驚いて振り返った。

紫色の瞳をした4代目が真後ろに立ち、手を差し出している。

3代目は4代目の瞳から少し視線をずらし、刀身を握り締めながら言った。

「…:これを渡したら…:短刀達を元に戻してくれるんだろ?」

「もちろんだ。その代わり、お前は消えるがね。俺と連結するんだ。」

「!…:」

3代目は4代目の瞳を真っ直ぐ見返し、刀身を持ち直して差し出した。

「…:そら…:受け取れよ。」

その言葉に、4代目がにやりと笑った。そして、3代目の刀身を握った。3代目の姿が、光となって消えた。

……

2代目は第3部隊の宿舎へ向かっていた。4代目と直接話してみようと思ったのだ。

宿舎にたどり着くと、庭へ回った。3代目の部屋には、その方が近道なのだ。

「？」

庭には誰もいなかった。

(短刀達はどうしたんだ?)

そう2代目が思った時、4代目が自室から姿を現し、笑顔で「やあ」と言った。

「ああ4代目、ちよつと話があつて。」

そう言つて、はつと4代目の顔を見た。笑顔が不自然に見える。ふと不安を感じ「3代目はどこにいる？」と尋ねた。

「3代目？3代目は俺じゃないか。」

「え？」

「何を寝ぼけてるんだよ、3代目は俺だつて。4代目なんていないよ。」

「！」

4代目は、2代目にニコニコとしながら近づいた。

「ねえ、今から手合いを頼めないかな。本体で。」

2代目は、じつと4代目を見据えながら答えた。

「本体で、手合いをするのは禁じられている。」

「そんな固いこと言うなよ。ここは第3部隊の庭だ。俺達しかいないつて。」

「お前、誰だ？」

2代目の言葉に、4代目がにやりと笑つて言った。

「誰つて?…俺は「大俱利伽羅」だ。」

4代目の瞳が、紫色に輝いた。

……

石切丸は、第3部隊の宿舎に向かって走っていた。

(不甲斐ない！…私がいない間に大変なこと！)

その石切丸の前には、1代目「大俱利伽羅」が走っている。

石切丸は、出陣に出ているのである。帰ってきてすぐに、第3部隊の異変を感じたのだった。

1代目は宿舎の前まで来ると、石切丸にうなずいて、裏へと走った。

石切丸は宿舎の玄関を開け放ち、土足のまま中へ入った。

…

1代目は庭に入るなり、いきなり叫んだ。

「渡すな！俱利伽羅！」

4代目に本体を差し出していた2代目は、驚いた表情で1代目に振り返った。

「1代目！来るな！」

4代目の体から、紫のオーラの炎が立ち上ったと同時に強い風が吹き、1代目の体を吹き飛ばした。2代目が叫んだ。

「早く俺を受け取れ！1代目には手を出すなっ！」

「やっぱり、お前はいらない。」

「！」

2代目が、とつさに刀身を抜いた時、ざっと風が吹いた。

「妖魔捕獲！」

その石切丸の声と共に、無数の札が渦を巻き、4代目を囲んだ。

「!!」

4代目は、渦の中で両腕を抱え込んだ。

1代目が、2代目に駆け寄った。

「3代目は？」

「4代目の中だ。…おそらく、連結…」

「!…」

1代目は、黙って刀身を抜いた。

「1代目？」

「下がってろ。」

2代目にそう言うと、1代目は刀身を握り締めて、札の嵐の中にいる4代目を見据えた。

(俺にできるか…?)

ここに来る前、石切丸から、妖魔を退散する方法を聞いていた。だが、それは1代目でも難しい方法だった。

1代目はふーっと息を吐いた。

(やるしかない。3代目を救うためにも…)

1代目は、1度刀身を払い構えた。

4代目が、札の渦の中で苦しみながらも、刀を抜いて立っている。

(先に、手合いをしておいて良かった。)

1代目はそう思うと、4代目に斬りかかった。札の嵐の中から、4代目がその刀を弾いた。

2代目がそれを見て刀身を抜いた。が、いつの間にか傍に来ていた石切丸にその手を押さえられた。

「!・石切丸さん?」

「大丈夫。1代目を信じて見ておいで。」

2代目はしばらくためらっていたが、やがて刀身を戻した。

1代目と4代目は、打ち合い続けている。きいん、という音が何度も響き渡った。

「互角だ。」

思わず呟いたその2代目の言葉に、石切丸が首を振った。

「いや、1代目が手を抜いているんだ。」

「!?…どうして!」

「そのまま斬ってしまうと、4代目が壊れる。同時に3代目もね。」
「!!」

2代目は目を見張り、4代目と刀を交わす1代目を見た。石切丸が続けた。

「壊してしまった方が楽だ。…だが、彼は2人とも救おうとしている。」

『簡単に壊せなんて言うなっ!この馬鹿っ!』

2代目は、1代目に言われた言葉を思い出した。

「1代目…」

2代目は、目が熱くなるのを感じた。そして、零れたものを払った。
……

1代目は4代目と打ち合いながら、4代目を貫くタイミングを計っていた。

『札ごと貫くんです。できるだけ多くの札で囲みますから、その中のどれでもいい。札は、突き刺したと同時に効力を発します。札から突き刺して、4代目に貫通させるんです。』

(やるしかない！)

そう思った時、4代目が急に声を上げ、刀を落とした。

「!？」

1代目が、札の嵐の中を目を凝らして見ると、3代目が4代目の腕を背中に回し、押さえ込んでいた。

「3代目！」

1代目が思わず声を上げた。3代目は4代目を押さえ込んだまま、1代目に背を向けて叫んだ。

「1代目！俺ごとこいつを刺せ！」

「!」

1代目は初めて、ひるんだ様子を見せた。

「…しかし…」

「早くっ!!俺が消える前に!!」

「!……」

1代目は刀を持ちかえ、突きの構えになった。

2代目が拳を目に当てて、座り込んだ。石切丸が、その2代目の肩にそっと手を乗せた。

「大丈夫。信じるんだ。」

拳を目に当てたまま、声を押し殺して泣く2代目に、石切丸が優しく言った。

「3代目！許せ！」

1代目はそう叫ぶと共に、札の嵐の中にいる3代目の背を刺し貫いた。3代目の体がのけぞる。同時に4代目の断末魔の叫び声が響い

た。

……

1代目の本体は、見事に札を貫いていた。

しかし、札が散乱している他には、何も残らなかった。

「3代目は？」

2代目が立ち上がりながら、震える声で言った。1代目と石切丸は黙り込んでいる。

「そんな……」

「あれー？2代目？1代目も石切丸さんも！」

「宿舎の中から、3代目が現れて言った。」

「!!!」

全員が、3代目に向いた。

「うわー、紙散らかしちゃって……」

3代目が庭に散乱している札を見ながらそう言った時、4代目が障子の影から、顔だけを出した。

「!!」

「どうか……しましたか？」

4代目が言った。3代目が4代目に振り返って、首を傾げた。

「大俱利伽羅さーん!!できたよー!!」

短刀達の声が、宿舎の奥から響いている。3代目が、顔だけを後ろに向けて叫んだ。

「あー！ちよつと待ってろー！すぐ戻るから！」

「俺、先に戻ってようか？」

4代目が、親指を奥に向けて3代目に言った。

「あ、そうだな。……あー待って！あれを出しといて欲しいんだ。」

「ああ、あれな。蒸すのか？」

「ん。焼いてもいいけど……。4代目はどっちがいい？」

「3代目の好きな方でいいんじゃない？」

「じゃ、蒸して。」

「わかった。」

「で、4代目。」

「何？」

4代目が行きかけて、3代目に振り返った。

「さっきから言おうと思ってたんだけどさ、その仏頂面どうにかなら
ないのか？短刀達が、お前のこと怖がってるぞ。」

「何を言うんだ。俺はこれで「大爆笑」なんだ。」

それを聞いた3代目が、腹を抱えて笑った。

「お前…案外、面白い奴だな！」

4代目はにやりと笑ってから、立ち尽くしている石切丸達に頭を下
げ、奥へ入って行った。

3代目は笑いながら、石切丸達に振り返った。

まだ呆然として立っている3人に、3代目は困ったように「えーつ
と」と呟いてから、

「短刀達と作った餃子…一緒に食べます？」
と言った。

3人は、ただ黙ってうなずいた。

それぞれの劣等感

「うーん……」

大俱利伽羅4人は2振りの刀身を囲み、それぞれが4つんばいになつて、その刀身を凝視していた。

「どこが、どう贋作（レプリカ）なんだ？」

1振りは1代目の本体で、2振り目は4代目の本体である。

「全く、一緒に見えるけどなあ。」

3代目が、体を起こして言った。

「俺にもわからない。4代目、勘違いじゃないの？」

2代目が、4代目と一緒に体を起こしながら言った。4代目が呟くように言った。

「…でも、記憶が本当になくて……」

「うーん、それだけでレプリカつてのもなあ。」

「逆にレプリカだとしたら、これある意味すごくくない？本物と違いがわからないんだよ？」

「そうだな。」

2代目3代目が感心する中で、1代目はまだ2振りの刀身をじっと見ている。

「1代目にはわかる？」

3代目が、まだ体を起こさない1代目に尋ねた。

「……」

1代目は、ゆっくりと体を上げた。

「わからない。俱利伽羅文様を細かく見たが、全く同じに見える。」

4人は揃って、あぐらに座りなおした。2代目が言った。

「やつぱり気のせいだつて。記憶がまだ戻ってないだけだよ。これから出てくるんじゃないの？」

「そうでしょうか？」

4代目は、まだ不安げにしながらも刀身を収めた。

「レプリカだとしても、それはそれで「大俱利伽羅」だ。俺は気にしないよ。」

1代目も、刀身を収めながら言った。2代目3代目が、それぞれ4代目に向けて言った。

「俺もだ。」

「俺も。」

4代目は、少し顔を赤らめ「ありがとう」と言った。最近、少しずつ表情が出てきている。それが、他の「大俱利伽羅」には嬉しかった。……

3、4代目は、それぞれ自室で寝転んでいた。同じように、組んだ手を頭に敷き、仰向けに寝ている。

「1代目2代目は、どうかかわからないけど……。」

3代目が口を開いた。4代目が隣の3代目に顔だけを向けた。

「ん？」

「俺達、銘がないじゃない。」

「!……ああ。」

「それが、劣等感だったなあ……政宗様のところにいた時は。光忠は徳川の誰かさんに心酔されちゃって持つてかれるし、俺より後に来た「鶴丸国永」って刀だって、皇室に献上されちゃうし……。俺だけ取り残されたって感じ。」

「……そうなのか。」

「ん。記憶があっても、辛い思い出ばかりだよ。」

3代目と4代目は、そのまましばらく黙り込んだ。

……その時……

「俱利伽羅——!」

と、かわいらしい声が響いた。

乱（みだれ）籐四郎だ。いつもの少女姿で庭を走ってきている。

「お——乱——!」

3代目が飛び起きて、縁側から降り靴を履いた。4代目が苦笑しながら、起き上がる。

乱が、3代目に抱きつきながら言った。

「俱利伽羅に会いたくて、来ちゃった!」

「よお——」

3代目は、乱を幼い子どものように抱き上げて、片腕で抱えた。

「今日は、何して遊ぶんだ？」

「鬼ごっこー！…あ、4代目さんーごきげんよう！」

乱が部屋の中の4代目に気づいて、ぺこりと頭を下げた。

「ああ、ごきげんよう。」

4代目が、少し口の端を上げて答えた。3代目が乱を抱えたまま、4代目に言った。

「ちよつと、こいつと遊んでくる。」

「ああ。人がいる時は、あまりいちやつくなよ。」

「ははっわかった。」

3代目はそう言うのと、乱としゃべりながら庭を出て行った。

4代目は再び、組んだ手を枕にして、体を横たえた。

「記憶があつても辛いだけ…か。」

ふと、そう呟いた。

……

「倶利伽羅、ずるいつ！」

「フェイントも覚えなきやな、乱！」

3代目は、右に左にとジグザグに逃げながら、乱を翻弄している。

これは、実践でも使っている。卑怯な手だが、まともに打ち合い続けると疲れてしまい、集中力がもたなくなるのだ。

とにかく出陣や遠征では、命がかかっている。1代目や2代目のように強ければ、そんな手は必要ないだろうが…。

3代目は遊びを通じて、それを乱に教えているのだ。

かといって、乱は1代目だ。正直、3代目より戦いの経験がある。だが、何事も真正面にぶつかっていく乱を見ると、いつか乱が命を落としそうで怖い。

「よおーっしー！」

息を切らせた乱が、一旦後ずさりしてから駆け出し、ジャンプをした。

短刀は身が軽い。くると空中で一回転して、3代目の胸に飛び込んだ。

「うわっ！」

3代目がまともに乱の体を抱き止め、そのまま仰向けにひっくり返った。

「ごうきーん！」

3代目が、乱を抱きしめたまま言った。乱が「やったー！」と体を起こして拳を上げると、息をきらせながら、再び3代目の胸に体を戻した。

鳥のさえずりだけが響いている。

……

「はい！お花の冠！」

乱は、今作ったばかりのシロツメグサの花輪を、芝生にあぐらを掻いて座っている3代目の頭に乗せた。

「おーサンキュー」

3代目が、その花輪に手を添えて「似合うか？」と言った。

本丸は不思議なところで、年がら年中四季折々の花が庭中に咲き乱れている。その中で、このシロツメグサの花畑は、乱の1番のお気に入りの場所だ。

「似合う似合う！可愛いよ！」

「可愛いのはお前だ。」

「もおっ！倶利伽羅またそれー！」

「可愛いんだから仕方ないだろう。」

乱はくすくす笑った。…だが、ふと真顔でうつむき「そろそろ時間だ」と呟いた。

3代目の表情が曇った。

「…出陣か？」

乱はうなずいて立ち上がり、スカートをパンパンと払った。3代目は花輪をはずし、乱を見上げながら言った。

「お前が俺んところ来る時は、いつも出陣か遠征の前だもんな。」

「……」

3代目が、乱の手を取った。

「無事に帰って来い。無茶すんなよ。」

「わかってる。」

乱は、3代目の手を払うようにして踵を反し、走り出した。

「じゃあ、バイバイ！倶利伽羅！」

その声に、3代目は立ち上がって叫んだ。

「ばかっ！バイバイじゃない！「また後で」って言えつつつてるだろ！！」

乱の走り去る姿が、木々の間に消えた。

3代目は、手に持った花輪を持ち上げて見つめた。

「無事に帰って来い。」

そう祈るように呟いた。

……

3代目と乱の出会い、3代目が餓鬼に食われかけた後だった。

「第1部隊の出陣を経験しておけ。勉強になる。」

そう1代目に言われて、出陣した時である。

その第1部隊の中に、1人少女姿の「乱」がいた。

驚かないはずがない。隊長の長谷部に思わず「何かの間違いでは？」と尋ねた。

「乱は、あんな格好をしても凄腕なんだ。良かったら、彼の傍についているといい。」

長谷部にそう言われ、3代目はうなずいた。

……

乱の活躍に、3代目は感心するばかりだった。短刀はとにかく身が軽い。なんなく飛び上がり、敵の頭を蹴り飛ばすなどお手の物だ。

「そこをどけっ！」

敵と刀を切り結んでいた3代目は、その乱の声に思わず体を屈めた。乱がその背に跳び箱のように手を突き、前にいる敵に、真っ向から短刀を突き刺した。

「！！」

3代目は、ただ呆然と立ち尽くした。

「うしろっ！」

振り返った乱にそう言われ、3代目は振り返りざまに、刀を下段か

ら振り上げる。

手ごたえを感じた。上段に刀を振りかぶっていた敵が、どおつという音と共にそのままの姿で地面に倒れた。

「少しでもぼんやりしていると、命持って行かれるぞ！」

乱が、額の汗を拭いながら言った。

3代目も、顎からしたたる汗を拳で拭いながら「わかった」と言い、辺りを見渡した。乱が、くいつと顎を上げて言った。

「ここは終わりだ。隊長と合流しよう。」

「ん。」

3代目は乱に続いて、歩き出した。

(なんだ、スカートの下はスパッツ履いてんのか。)のんきにも、そう思った。

……

本丸についてから、長谷部が満足気に、部隊のメンバーを見渡しながらい言った。

「今日も、皆無事で戻れてよかった。よく体を休めるように。」

全員が長谷部に頭を下げ、それぞれの宿舎に向かった。

「乱さん。」

宿舎に向かって歩き出した乱に、3代目があわてるように追いかけて声をかけた。

「?なんだ?」

乱が振り返って、3代目を見上げた。

「俺と付き合ってください。」

「!!」

乱が背伸びをして、3代目の頬を平手打ちした。3代目は驚く様子もなく、乱に向いた。想定内だった。

乱は顔を真っ赤にして怒っている。

「ばかにするなっ！」

「待って！」

3代目が、踵を返した乱の前に回りこんで尋ねた。

「その少女姿は、なんのためですか?」

「僕にわかるか！生まれた時点でこの格好だったんだ！」

「…そうなのか…」

「1つだけ言えることは、他の籐四郎（きょうだい）たちと違って、僕1人だけ「乱刃」なんだ。後は皆「直刀」だ。」

3代目は、目を見開いた。

「…僕は…」

乱は、何かを言いかけて口をつぐんだ。

「何です？」

3代目が、その先をうながした。乱は、3代目の顔を見上げて言った。

「…僕自身が、嫌いだ。」

「！」

乱は3代目に背を向けて、その場を立ち去った。

……

（あれから、宿舎に通いつめたんだっけ。）

3代目は回想しながら、芝生に寝転んだまま、青く澄み切った空を見上げていた。

（花束持って行ったり、お菓子を持っていったり…）

そこまで思っ、3代目は笑い出してしまった。

（その度に、平手打ち食らったっけ。でも…）

大俱利伽羅部隊の初出陣で重傷を負った時、3代目は傷が治っているにもかかわらず、意識不明の状態が続いた。やっと目覚めたのは、2日経ってからだ。その後も、しばらく出陣に出してもらえなかった。

乱の事は心の端に引つかかっていたが、会う気力もなく、ただ呆然と自室で日々を過ごした。

そんな時、乱が宿舎を訪れた。2代目が、遠征でいなかった時だ。

その時、自室で寝入っていた3代目は、全く乱に気づいていなかった。

どれだけ傍にいたのか、ふと目を覚ましたら、乱が自分の顔を覗き込んでいた。

「!!!
乱さん!」

3代目は飛び起きて、思わずその場に正座した。

「呼び捨てでいい。」

乱が真顔で言った。手には、シロツメグサの花束を握っている。乱は黙って、その花束を3代目に差し出した。

「やる」

3代目は受け取って「ありがとうございます」と言った。

「敬語もやめろ。」

「……」

「僕には、タメ口でいい。」

乱はそう言うのと、顔を赤くして立ち上がった。

「帰る」

「あ、待って乱さん…じゃない、乱!」

乱が、赤い顔のまま3代目を見た。3代目が、その乱の手を取った。

「これから、1代目と出陣だよな。」

「!!」

「帰ってきたら…あ、疲れてるよな。…明日、会いに行くから…遊ぼう。」

乱が、こくんとうなずいた。そして3代目の手を払うと縁側に座り、靴を履きながら言った。

「…付き合ってもいいぞ。」

3代目が目を見開いた。慌てて立ち上がった時、乱の姿は、もう視界から消えていた。

3代目は、黙ってガッツポーズをした。

……

(それから、恋人ごっこが始まったんだっけ。)

空を飛ぶ鳥を見上げながら、3代目は思った。

(あいつが時々見せる寂しげな顔が気になって…それを笑顔に変えさせるために、いちやつぎごっこを始めたんだ。)

『僕だけ「乱刃」なんだ』

3代目は思った。

(それを聞いた時、言ってやれば良かった。)
俺だって「無銘刀」だよ……って。

友を殺せるか

1代目「大俱利伽羅」は、息を切らしながら、手入部屋に向かっていた。

(光忠が重傷だなんて…)

1代目自身は、第4部隊の隊長として遠征に出ている。無事に終わったが、帰って長谷部に報告に行くと、長谷部がうろたえた様子で「すぐに手入部屋に行ってくれ」と言った。

手入部屋の前には、2、3、4代目「大俱利伽羅」全員が正座していた。4代目が「1代目!」と言い、顔を上げた。2代目3代目は沈鬱な表情でうつむいたままだ。

「光忠の様子は!」

何も答えない2人の代わりに、4代目が答えた。

「帰ってこられた時は、もう歩けない状態でした。俺達3人でなんとか担いでここまで…」

「光忠…」

2代目が口を開いた。

「出陣に出る前からおかしかったんだ…」

「!何?」

1代目は先に遠征に出たため、光忠の出陣を見送っていない。代わりに、2代目が見送ってくれたのだ。

「どうおかしかったんだ?」

1代目が、2代目の前に片膝をついて尋ねた。3、4代目も不安そうな表情で2代目を見た。

「1代目によろしく…とか…後の事は頼むね…とか…まるで、もう会えないかのような言葉ばかり並べて…。俺…光忠が冗談で言ってるのかと思って、笑って「わかった、任せろ」って…」

2代目はそこまで言って、目に手を当てた。

3代目が、2代目の肩に手を乗せた。2代目は、一旦涙を払ってから続けた。

「今、思えば、こうなることを予感してたんだ。」

「…まだ、壊れたわけじゃない。」

1代目が、2代目の頭に手を乗せて言った。

「きつと、元に戻る。」

2代目がうなずいた。4代目が2代目の背に手を乗せた。

……

1代目は、長谷部の部屋にいた。光忠が出陣した状況を尋ねにきたのだ。

長谷部が、記録帖を開いて黙り込んでいる。

「長谷部、どうした？俺にも見せてくれ。なんだ、さつきから抱え込むようにして…」

「…これを書いたのは、確か薬研（やげん）だったと思うが…。」

「それがどうした？」

「おかしいんだ。こんなこと本当にあつたんだらうか？」

「だから、見せろ！」

「お前が…」

長谷部が顔を上げて、1代目を見た。

「お前が、急に現れたんだそうだ。」

「!?何っ!？」

1代目は、思わず腰を浮かせた。

……

「俱利伽羅?」

光忠は、突然背中に現れた1代目「大俱利伽羅」に振り返った。

「どうしたんだ？お前、第4部隊と遠征じゃなかったか？」

1代目は黙って、刀を抜いた。

「!!」

光忠もとつさに刀を抜き、構えた。

1代目が無表情のまま、光忠に刀を振り下げた。光忠は、それを弾いた。

（俱利伽羅じゃないー!）

光忠は、そう思いなおすと、1代目に斬りかかった。

「光忠殿っ!!」

短刀の薬研籐四郎が、駆け寄ってきた。そして、2人が戦うのを見て立ち止まった。

光忠が「手を出すな！」と叫んだ。

光忠と1代目が、間断なく打ち合っているのを見て、薬研は（互角だ）と思った。

そのうちに、光忠に疲れが見えてきた。対して1代目は表情を変えず、まるで人形のように、光忠を追い詰めていく。

薬研は助けようと刀を抜いた。が、光忠が「駄目だ！」と、息を切らしながら言った。

「光忠殿…」

光忠は1代目の刀を払い上げると、体を返して1代目の体を蹴り飛ばした。1代目の体が地面に叩きつけられた。

「今だっ！」

薬研が思わず声を上げた。光忠は両手で刀を持ちかえ、上段から1代目を突き刺そうとした。

だが…そのまま動かなくなった。

「光忠殿っ！」

薬研の叫びと共に、光忠は1代目に脇腹を刺し貫かれた。

……

「…後は、他で戦っていた石切丸が戻ってきて、札で本体をさらしたとたん逃げられたとの事だ。」

長谷部がそう言って、記録帖を閉じた。

「…光忠は…俺を刺すことに躊躇したってことか…」

1代目が、目に手を当てて言った。長谷部が沈鬱な表情でうなずいた。

「頭ではお前じゃないとわかっているけど、刺せなかったんだろう。」

「くっそ…卑怯者…」

1代目は立ち上がると、障子を大きな音を立てて開け放し、足早に出て行った。

……

「1代目の写しだっ!?」

3代目が2代目の部屋で叫んだ。2代目がうなずいた。

「1代目そつくりの敵だったから、光忠、刀を振れなかつたって…」
「それで、やられたってわけか。」

3代目が唇を噛んだ。2代目が口を開いた。

「狡猾な敵だな。まだ自分自身が現れたのなら戦えるが、相手が自分が信頼している人となると…」

「本当だ。まだ自分自身の方が、ためらわず殺れる。」

「俺達だって、1代目が出てきたら…躊躇してしまうよな…」

「…というか、勝てる自信をまず失う。」

その時「失礼する」という声と共に障子が開き、4代目が入ってきた。
た。

「交代の時間か！」

2代目が腰を上げた。3代目が、4代目に尋ねた。

「光忠の様子は？」

「相変わらずだ…苦しそうな息遣いが続いてて…」

4代目がそこで黙り込んだ。

「…行ってくる。」

2代目が立ち上がり、うなだれる4代目の肩をぽんと叩いてから、部屋を出て行った。

「1代目は来たか？」

3代目が言った。4代目は首を振った。

「いや…。どこにいるのかもわからない。」

「…1代目が一番辛いだろうな。」

「ああ。おかしな気を起こさないといいが。」

「!!」

3代目は顔を上げ、自分を見返している4代目に向いた。

「1代目を探しに行こう！」

4代目はうなずき、3代目と同時に立ち上がった。

……

1代目は、池のほとりに立っていた。

(同じ出陣先に行けば、俺の写しに会えるのだろうか?)

じつと、その事を考えていた。

(俺を殺れるのは、俺しかない…。よし、長谷部に頼んでみよう。)

1代目はそう決意すると、振り返って本舎に向かおうとした。すると、光忠が立っていた。

「光忠?」

そう呟いてから、1代目はほっとした表情になった。

「お前、治ったのか!」

そう言ったが、光忠は無表情だ。

「!!」

1代目は表情を変えた。

「…まさか、お前は…」

光忠が、刀を抜いた。1代目も条件反射で刀身を抜き、光忠に向けた。

(光忠の気持ちが変わる…)

1代目は、刀を構えたままそう思った。

(お前と戦うなんて…お前を殺すことなんて…俺にはできるのか…?)

「1代目!」

3代目と4代目が駆け寄ってきた。そして1代目の前にいる光忠を見て、2人ともぎくりとしたように立ち止まった。

「光忠?」

「違う!」

4代目が、3代目の肩を掴んで言った。

「あれが、写しだ。」

3代目が刀身を出現させ、抜いた。

「手を出すな!!」

1代目が叫んだ。

「こいつは、俺独りで十分だ!」

齒軋りする3代目の体を、4代目が押さえた。

「任せよう。1代目に」

4代目がそう言ったとき、2人の前に光忠が現れた。

「!!」

4代目が振り返ると、自分の後ろにも光忠がいる。

「こいつら…俺らを翻弄するつもりだ!」

3代目と4代目は同時に刀身を抜いた。

1代目はそれに気づいたが、自分が戦うのに精一杯だった。無表情の光忠が、躊躇なく1代目を攻めている。

(くそ、あいつらはまだ、光忠と戦う力なんて…)

1代目はそう思いながら、振り下ろされる刀を払った。

…

2代目は、光忠の声に顔を上げた。

「俱利伽羅…」

「光忠!」

2代目は腰を上げて、光忠の顔を覗き込んだ。光忠が、うつすらと目を見開いて2代目を見た。

「光忠!」

「俱利伽羅が…」

「ん、1代目が何?」

「…今…僕と戦ってる…」

2代目は「え?」と驚いた目で光忠を見た。

「だから…」

光忠の声が出なくなった。2代目は、光忠の口元に耳を寄せた。光忠が何かを囁いた。それを聞き取った2代目は目を見開き「わかった!」と言い、部屋を飛び出した。

…

池のほとりでは、3人が戦い続けていた。

だが、3人とも疲れが出てきている。さすがの1代目も息を切らしていた。

(らちがあかない!)

1代目はそう思った。いつでも、光忠を刺し貫こうと思えばできるのに、どうしてもできなかった。

(だめだ…俺にも…あいつを刺すことなどできない…)

1代目がそう思った時、遠くから2代目の声が響いた。

「光忠が目を覚ました！もう大丈夫だから、ためらうなっ!!」

1代目は光忠と刀を結んだまま、駆け寄ってくる2代目に驚いた目を向けた。

3代目、4代目も2代目に向いた。

「光忠が？」

1代目が呟くように言った。そして、目の前の光忠ににやりと笑った。

「だそうだ。おあいにく様だなっ！」

そう言って、光忠を押しつけるようにして刀を払うと、初めて刀の切っ先を光忠に向けた。

その時、2代目が「くらえっ！」と叫んで飛び上がり、1代目の前の光忠に何かをぶつけた。すると、3体の光忠が天を仰ぎ、狼の遠吠えのような声を上げた。

そして、その姿は黒い影となった。

「今だっ!!」

2代目の声と共に、3人の大俱利伽羅は、影を刺し貫いた。

それぞれの影の悲鳴が上がった。

……

「札を、石に巻きつけたのか。」

1代目が、残った札を石ごと持ちながら、2代目に言った。

「だって、それしか投げる方法ないから。」

2代目が頭を掻きながら言った。1代目が尋ねた。

「この札はどうしたんだ？」

「ここに来る前、石切丸さんの部屋に行ったんだ。そしたら夜戦でいなくなっただけで、机の上に「何かあったら、これを使うように」っていう書置きと、お札が1枚置いてあったんだ。」

「……そうだったのか……」

1代目は（後で石切丸に、礼をしにいこう）と思いながらうなずいた。2代目が続けた。

「で、光忠からは「自分は大丈夫だからって、俱利伽羅に言え」って。

「そうすれば、きつとためらわずに自分を突き刺せる」って。」

「…！そうか…」

「お札はいるかどうかわからなかったけど、念のために使ったほうがいいと思うて。」

「おかげで助かった。」

1代目はそう言って、傍で大の字に倒れている3代目と4代目を、苦笑しながら見た。

「あいつらには、いい鍛錬になったようだな。」

2代目も笑って、2人を見ながら言った。

「俺も戦いたかったな、光忠と。」

「奴が元気になったら、手合いを頼んでみる。」

1代目のその言葉に、2代目がうなずいて、微笑んだ。

……

「光忠」

1代目が手入部屋に入り、光忠の傍に座った。部屋の外には、2代目達が正座をして座っている。

光忠が1代目を見て、微笑んだ。

「…良かった…無事で…」

「今は、しゃべるな。」

「…1つだけ…謝りたいことが…」

嘎れた声で、光忠が言った。1代目は目を見開き「なんだ」と言った。

「出陣先でお前が現れた時…お前が死んだのかと思った。」

「！…」

「だから…ためらってしまった…」

「…そうか…」

(2代目に「大丈夫」と言わせたのかそういうことか)と、1代目は思った。

「お前が簡単に死ぬわけないって、今になって思っ…」

「もういい。」

1代目は、光忠の頭に手を乗せた。

「とにかく、早く体を治せ。」

光忠が、うなずいた。そして、眉をしかめながら言った。
「頭を触るな。髪が乱れる。」

1代目は、目を見開いた。部屋の外で、2代目達が大笑いした。

〈閑話休題〉 2代目の女装

※どうしてこうなったかは、前の閑話休題「大俱利伽羅と乱籐四郎」をお読みください（＾＾；）

……

「うわー…可愛いー！」

3代目が思わず声を上げた。2代目は仏頂面で「やめろ」と言った。その隣で4代目も目を見張っている。

乱が「最高傑作！」と言いながら、2代目の髪を綺麗に整えた。

「ほんと、可愛いぞ。2代目君！」

乱がそう言って、2代目に鏡を向けた。

「!!」

2代目が目を見張り、「え？これ俺？」と言った。

「そうだよ。なかなかのもんだろ？」

「もつと、化け物みたいになると思ってた。」

2代目が、自分の顔をまじまじと見ながら言った。

「化け物って。」

4代目が笑った。3代目が「こっち向いて！こっち！」と、2代目の肩に手を乗せた。

2代目が向いた。

「まじ、めっちゃ、可愛いー！」

「俱利伽羅っ！」

乱が怒ったように立ち上がり、3代目の顔を両手で挟んで「あなたの恋人はこっち！」と言った。

「ふあい。ごめんなひゃい。」

3代目が謝った。2代目4代目が笑った。

乱が「そうだっ！」っと、3代目の顔から手を離して言った。

「お前達、踊ったらどうだ！」

「え？」

「3人で踊るんだよ！そうだな、2代目真ん中にして、お前達がバックダンサーな。」

「ちよ、ちよつと、俺も?」

4代目がうろたえたように言った。

「もちろんだ!やるからには、完璧にやらなきゃ!」

「おい、乱。俺達にも女装しろって言うのか?」

「お前達は、ホストだ!」

「ホスト?」

「そうだ!よしっ!何かいい動画探して来てやる!」

乱の暴走に、3人は逆らえず黙ってうなずいていた。

……

結局、3人で踊らされる羽目になったが、乱のスパルタ教育のおかげで、かなりのレベルの高いダンスを披露できた。

「これ…鬼ごっこよりきついな。」

ホストの格好をした3代目が、宴会場の隣の部屋で座り込み、息を切らしながら言った。4代目も同じホスト姿で座り込んで、うなずいている。

2代目が「やつと終わったー!」と、女装のまま大の字に寝転んだ。

3代目が、笑いながら言った。

「まさかビデオまで撮られるとは。」

「あれ、ずっと残るんだよな。消されるまで。」

「うん。俺達が死んでもな。」

「うわー。なんか恥ずかしい!」

「お前達はいいよ!俺なんて、女装したのが残るんだぞ!」

2代目が飛び起きて言った。3、4代目が顔を見合わせて笑った。

「それは、確かに嫌だな。」

「消せないか?長谷部さんが酔っ払ってる間に、カメラ奪って。」

「主に見せるって言ってたからなあ。主も楽しみにしてるって言うってたらしいし。」

「…消せないか…」

「2代目あきらめろ。」

3代目の言葉に、2代目はがっくりと肩を落とした。

……

どんなだったかは、ご想像にお任せいたします（無責任）

4代目の焦り

1代目大俱利伽羅が、長谷部の部屋で神妙な表情で座っている。隣で、光忠も眉をしかめていた。

長谷部が、ため息をついている。大俱利伽羅が口を開いた。

「最近、確かに妖魔の類（たぐい）の事象が多いな。」

「どうも、あつちの世界の主のパソコンがおかしいらしんだ。」

長谷部の言葉に、光忠がたずねた。

「現世ってやつか？」

「そう。時々、そのパソコンが勝手に切れて立ち上がらなくなるらしい。」

「その間に、こつちに妖魔が来ているって事か。」

「そうだ。」

大俱利伽羅が、考え込むように腕を組んだ。長谷部が言った。

「データとやらは、本来のシステムに依存しているから、主のパソコンが壊れても元に戻すことはできるらしいが、システムとのアクセスが切れたタイミングで「付喪神」の何体かが消えてしまったって事例があるんだそうだ。あるいは、本丸そのものが消える可能性もあるらしい。」

「本丸が消える?」

「そうだ。」

長谷部が、固い表情で大俱利伽羅と光忠を見た。

「とにかく、俺達が消えるかもしれない覚悟だけはしておいてくれ。」

「俺達はいいが…。他の者たちはどうする?」

「……」

大俱利伽羅の言葉に、長谷部が黙り込んだ。

……

「本丸が消える!?!」

3代目が思わず声を上げた。隣に座っている4代目も目を見開いている。向かいに座っている2代目がうなずいた。

「1代目から言われたんだ。ただ、短刀達には黙っておくようにっ

て。」

「…そうだな…」

2代目が、厳しい表情で3代目に言った。

「乱（みだれ）にも言うなよ。お前、口軽いからな。」

「そんな重い話、乱にするわけないだろう！」

「ならいいが。」

「どうして、本丸が消えるなんてことになるのか、聞いたのか？」

4代目が本題に戻した。

「ああ、なんでも、主のあつちの世界のパソコンの調子が悪いそうなんだ。一応、他の端末？だっけか、連動してあるそうだけど、何が起るかわからないからって。」

「…ややこしそうだな。」

3代目が、頭を振りながら言った。4代目が身を乗り出して言った。

「俺達ができることはないのか？」

「あつちの世界の事だからなあ。無理じゃないか？」

2代目がため息をつきながら言った。

……

「俱利伽羅？どうしたの？」

乱にそう聞かれ、3代目は、はっとした。

「あ、なんでもない。」

「いつもと様子が違うよ？」

「乱が浮気してないかって考えててさ。」

「ちよつとっ！何それ！ひどい！」

「ごめんっ！」

ふいと横を向いた乱に、3代目が手を合わせた時、空が急に暗くなった。

「雨か？おい、乱、宿舎に帰れ。送るよ。」

「最近…空の色おかしいよな。」

「え？」

男言葉に戻った乱の視線を追い、3代目は自分も空を見上げた。

(普通の雨空だけだな。…だけど、確かに最近、青い空を見たことがない…)

3代目が、ふと黙り込んだ。乱が走り出しかけて、座り込んでいる3代目に振り返った。

「おい倶利伽羅!どうしたんだ?送ってくれるんだろ!」

「あ、ああ、ごめん。はい、おんぶしよう。」

「うん!」

乱は嬉しそうに、3代目の背中に飛び乗った。

……

4代目は、自室で寝転びながら考え込んでいた。

(あっちの世界のパソコンとつながっている何かがあるはずだ。それを使って、遠隔操作する事ができたら…)

そこまで思い、4代目はふと体を起こした。

「だめ元だ。長谷部さんに頼んでみよう。」

そう言って、立ち上がった。

……

長谷部は、パソコンを操作する4代目の横ではらはらしていた。

「頼むから、壊さないでくれよ。」

4代目は黙って、操作している。その後ろには、2代目と3代目の大倶利伽羅が座っていた。

「4代目が、こんなことに詳しいとはなあ。」

「どこで覚えるんだ?」

「さあ?自分でもわからないって言ってたけど…」

「ちよつと黙って!」

4代目がそう声を上げたので、2代目3代目は「はい」と口をつぐんだ。

「じゃなくて、長谷部さん。すみませんが、ちよつと部屋を出てもらえますか?集中できません。」

「えっ?」

4代目の言葉に、長谷部が固まった。

……

2代目3代目が、4代目を挟んで座り、パソコンの画面を見ている。

3代目が、目をこすりながら言った。

「さっぱりわからない。4代目わかるの?」

「…これ…特定のウイルスじゃないかな。」

「ウイルスって?」

2代目が眉をしかめて尋ねた。4代目が2代目に向き「近っ」と呟いてから言った。

「パソコンの病気みたいなものだよ。」

「こんなのが病気になるのか!?風邪引くとか!」

「ま、同じようなもんだね。」

それを聞いた3代目の脳裏に、パソコンがくしゃみする姿がよぎった。

「???」

「そのウイルスに適合するワクチンを導入すれば、すぐに治ると思うんだけどな。」

「ワクチン?」

「注射みたいなもんだよ。」

2代目に答えた4代目の言葉に、3代目の脳裏にパソコンが注射さ
れて「痛っ」と呟く姿が映る。

「???」

3代目のクエスチョンマークが止まらない。

「主は、それを知らないのかな?」

「一般のワクチンなら入れてるだろうけど、こういう特定のウイルス
に対するやつとなるとどうかな。」

「そのウイルスと言うのは、要するにこの本丸に妖魔を送り込むウイ
ルスって事か?」

「そう。」

2代目が、少しずつ理解できてきたようだ。

「つまり、そのウイルスを作ってる奴がいるってことだな。そいつを
なんとかすればいいのか。」

「いや、作った奴をやっつけたところで、ウイルスはなくならないよ。」

ワクチンを作らないと。」

「4代目できないのか?」

「そこまでは無理。探すことはできるけど、あるかどうかだな。」

「探してみよう!俺達も手伝うからさーな、3代目!...?3代目?」

3代目は、その場に頭を抱え込んで寝転がっていた。

……

「4代目、突き止めてくれて、ありがとう。主が喜んでいたよ。あつちの世界でワクチンとやらを探してみるって。」

長谷部がニコニコと微笑みながら言った。さっきの4代目の無礼など、主が喜べば簡単に忘れられる男である。

「そう…ですか…」

4代目の表情がすつきりとしめない。元々無表情だが、何か納得のいかない様子である。

「?どうした?4代目。」

「いえ。もっと、俺達にできる方法がないかも探してみようと思うのですが、またパソコンをお借りしていいでしょうか?」

「ああ、いいとも。よろしく頼む。」

長谷部が、立ち上がりながら言った。4代目も立ち上がり、長谷部の後をついた。

……

「4代目、調子はどうだい?」

最近、4代目がずっと主のパソコンにつきつきりだと聞いた2代目

3代目が、部屋を訪れた。

4代目が振り返った。

「!!」

2人はその目を見て、驚いた。

「4代目、目に隈(くま)できてるぞっ!大丈夫かつ!」

「……」

4代目は振り返ったまま、動かなくなった。

「4代目?」

「…何でもない。」

4代目はそう言うと、再び、パソコンに向いた。

「ちよつと休んだらどうだ？」

2代目が恐る恐る、4代目の背に言った。

4代目はしばらく黙っていたが、やがて「そうだな」と呟き、終了ボタンをクリックした。

……

その翌日から、4代目は出陣や遠征に自ら志願して行くようになった。

1代目との手合いも、打たれては立ち上がりを繰り返し、簡単に音を上げなくなった。

「何かすごい気迫なんだけど……」

2代目が、目の前で1代目と4代目と打ち合っているのを見ながら、隣にいる3代目に言った。3代目が目を見張ったまま、うなずいている。

「1代目がこんなに打ち返されてる姿……俺、初めて見た。」

3代目の呟きに、2代目が黙ったまま、うなずいた。

……

「え？同時に斬りかかる？」

4代目に、手合いを頼まれた2代目と3代目は、突然の4代目の言葉に聞き返した。

「ああ。頼む。1人の時に敵に囲まれた場合、どう戦えばいいかやってみたいんだ。」

「わかった。」

2人は、前後ろに4代目を挟み「行くぞ！」と声を上げた。

……時間の経過

「まだ、やるのかー？4代目！」

2代目3代目が、芝生にへたり込んでいる。4代目も息を切らしながら座り込んでいるが、目は疲れを見せていない。じつと1点を見つめて、考え込んでいる。

「4代目？」

3代目が、4代目に話しかけようとしたが、2代目が自分の唇に人

差し指を当てて、目で「何も言うな」と訴えた。3代目は口をつぐみ、ふてくされたように仰向けに寝っころがった。

「これじゃ、たどり着く前にやられちまう…」

そう4代目が呟いた。

(たどり着く前?)

2代目は、それを聞き漏らさなかった。

(どこに行くつもりなんだ? 出陣にせよ、必ず2人以上1組で行動することが決められてる。仲間とはぐれた時の想定としても…)

2代目は、じつと4代目の横顔を見つめながら眉をしかめた。

(「たどり着く」の意味がわからない。仲間と合流するまでという意味か?)

4代目が、すつくと立ち上がった。

「2代目、3代目、もう1度頼む。」

2代目が「ああ」と言って立ち上がり、不満気に上半身を起こした3代目に「やるぞ」と促した。

…

3代目は、ふと物音に目を覚ました。背中越しに4代目が寝ている方を見ると、4代目の姿はなく、開いていた障子がぱたりと閉められた。

3代目は、歩き去っていく4代目の静かな足音が消えてから、すつくと立ち上がった。

…

4代目は庭中まで歩き、月が翳った空を見上げた。

(…最近、晴れた日がない…。俺が思っているより、やばいのかもしれない。)

4代目は、手に持った木刀を片手で構えた。

(恐らく、今よりも暗闇で戦うことになるだろうな。今の俺にはまだ…)

その時、背中に殺気を感じ、振り返りざま木刀を振り上げた。

カン! という手ごたえを感じた。

相手の顔が見えない。

刀が振り下ろされたのを感じ、身をかわした。4代目は木刀を捨て、刀身を出現させた。

「おいおい本体はタブーだぞ！」

その慌てたような声に、4代目は目を見開いた。

……

3代目、4代目は、芝生に膝を立てて肩を並べ座っていた。お互い口を開かず、ただ座っている。

「最近さ。」

とうとう、3代目が口を開いた。4代目は黙っている。

「4代目が殺気立ってるって、2代目が心配しててさ。」

「！」

4代目は目を見開いた。

「鍛錬をするのは大事だけど、このところ度を過ぎてないか？」

3代目は、暗がりで黙ったままの4代目の横顔を見た。

「1代目も「4代目は何かあったのか？」って、俺達に聞いてきてさ。何か、出陣で失敗したのかとか思ってるみたいだけど…そんな話も聞かないし。」

4代目は黙ったままだ。3代目は、間をおいてから続けた。

「ただの鍛錬じゃないよな。」

4代目が、黙ったまま目を見開いた。

「命がけで、何か独りでしょうとしてるよな。」

4代目が、やっと口を開いた。

「…3代目の思い過ぎしだ。」

「声震えてるよ？」

「！……」

4代目は、暗がりの3代目に向いた。

「こんな周りが良く見えない時ってさ、目に頼れないから神経が研ぎ澄まされて、逆に相手の本性が見えたりするんだ。」

4代目は、ただ黙って3代目の暗い顔を見ている。3代目が続けた。

「光忠って、片目眼帯してるじゃない。片目って、歩くだけでも遠近感

が狂って怖いんだ。…俺2代目と、片目を塞いで戦う訓練をしてみたことがあるんだけど、目が塞がっている方から襲われたら、ほんと見えないうんだ。」

「……」

「それでも光忠が強いのは、片目が見えない分、俺達より神経が鋭いつて事。ただ、強いだけじゃないんだ。」

4代目は、目を見開いたままうつむいた。

「話、それたけどさ。」

3代目の声が少し柔らかくなった。4代目はうつむいたまま、次の言葉を待った。

「同じ「大俱利伽羅」として言うよ。独りで戦って、独りで死のうだなんて、やめてくれ。」

4代目が、3代目に向かって何かを言おうとした。

「レプリカとか、そんなこと関係ない。」

先に言われて、4代目は目を見開いた。3代目が続けた。

「独りで死のうとしてるお前は、どっちにしたって俺達と同じ「大俱利伽羅」なんだよ。」

4代目の見張った目から、光るものが零れた。

……

翌日 第2宿舎―

4代目は、2代目を前にしばらく黙り込んでいた。

3代目が隣に座り、心配気な表情で4代目を見ている。

4代目がやっと口を開いた。

「今から話すことは、1代目達には知られないようにして欲しいんだ。」

2代目と3代目はうなずいた。

「本丸が消えるかもしれないってことなんだけど…」

「ん。」

「…もう、猶予はないかもしれない。」

4代目がそう言って、顔を上げた。

2人は、目を見張った。

大俱利伽羅達の決意

2代目「大俱利伽羅」の部屋で、3代目4代目「大俱利伽羅」は、2代目を前に緊張した表情を見せていた。

「とにかく、この計画は俺達だけで実行する。宿舎の短刀達はもちろんだが、勘の強い1代目や光忠にも悟られないように気をつけよう。」

2代目の言葉に、2人はうなずいた。

……

「大俱利伽羅さん」

自室の縁側で考え事をしていた4代目は、その声に顔を上げた。3代目の短刀「五虎退（ごこたい）」が、目の前に立っている。

4代目はいつもの無表情のまま、五虎退を見た。五虎退は今にも泣き出しそうな顔をしている。

「取れないの」

「?何が?」

「4代目さんの腰布がね、洗濯物と一緒にお空へ飛んじやって…」
「え?」

「木に引っかかったんだけど、高くて取れないの。」

4代目は、黙って立ち上がった。

「ごめんなさい!」

五虎退が、怯えて肩をすくめた。4代目が言った。

「謝ることないよ。取りに行こう。」

「え?」

4代目が、五虎退に手を差し出した。五虎退は不思議そうにその手を見て、また4代目を見上げた。

「手をつなぐんだ。行くぞ。」

五虎退はうれしそうな顔をして、4代目の手に自分の手を乗せた。
(俺って、やっぱり怖いのか。)

そう思いながら、歩き出した。

……

確かに、4代目の腰布（3代目の物かもしれない）が、高い木の上

に引つかかっていた。

身の軽い五虎退でも、さすがに高すぎるようだ。

五虎退が、4代目の顔色を伺っていた。まだ怒られると思っ
ている。4代目は、五虎退に「ここにいろ」と言っ
て、木の幹に足をかけた。

「!!大俱利伽羅さん…」

「木登りは、得意なんだ。見てて。」

4代目はそう言うと、勢いをつけて、一番低い枝に片手をかけた。
浮いた足を幹に押し付けると、その足に力をこめて体を上げ、もう片
方の手で、その上の枝をつかんだ。

「大俱利伽羅さん、すごいー!」

五虎退が、4代目を見上げて叫んだ。

…

腰布は無事に回収できた。

4代目は、なんなく木から下り、五虎退に向いた。

「ありがとう!」

五虎退が言った。

「礼を言うのは、俺の方だ。」

4代目は、回収した腰布を腕に抱えて言った。

「洗濯、ありがとう。」

五虎退が驚いたような表情で、4代目を見上げた。

「うん!」

五虎退がそう嬉しそうに答えると、突然4代目は、五虎退を突き飛
ばした。

「!!?」

五虎退は、背中の痛みを堪えながら、ゆっくり体を上げた。

そして前を見た。

「!!大俱利伽羅さん!」

4代目がこちらを向き、体をのけぞらせていた。

その4代目の後ろには、何か黒い影がうごめいている。

4代目が、がくりと両膝をついた。…が、すぐに片膝を立て刀身を

出現させると、振り返りざまに刀身を抜き振り上げた。しかし、キンという音と共に弾かれる。

五虎退の目つきが変わり、短刀を出現させた。

「足手まといだ！逃げろー！」

その4代目の言葉に、五虎退は目を見張った。そして黙って刀を収めると、4代目に背を向けて走り出した。

4代目は、影が振り下ろす刀を弾き上げ、胴を払った。

影は、真つ二つに割れて消えた。

「…また…妖魔が…ここまで…」

4代目はそう呟くと、その場に倒れた。

「4代目!!」

3代目の声が、遠くからした。

……

4代目は、手入部屋でうつぶせに寝かされていた。斬りつけられた背中の傷は命には別状はないものの、深かった。

その4代目の手を、誰かが握った。

4代目がゆっくり目を開くと、五虎退が自分の手を握っている。

「…さつきは…ひどいことを言った…」

4代目が、呟くように言った。五虎退は首を振った。

「僕を逃がす為に言ってくれたんだよね。だから、3代目さん呼んだの。」

「…そうか…お前はかしこいな。」

4代目はそう言うと、目を閉じた。そして、そつと五虎退の手を握り返した。

……

3代目「大俱利伽羅」は、2代目「大俱利伽羅」の部屋で神妙な表情で座っている。

「石切丸さんのお札、それぞれの宿舎には貼ってるけど…庭となると、どうすればいいか。」

3代目が、ため息をついた。

「4代目が言っていたとおり、かなりやばい状態かもしれない。」

2代目が言った。

「すぐにも計画を実行したいところだけど…4代目がいないと…」
そこまで言って、2代目は口をつぐみ障子を見た。ばたばたと短刀
達が走る音がする。3代目がため息をつき、障子を開きながら言っ
た。

「おい！廊下は走るなって言ってるだろ！」

「薬研が!!」

3代目は、2代目と見開いた目を合わせ、庭へ飛び出した。

2代目は、一緒に追おうとする短刀達を「待て！」と止めた。

「お前らは出るな！」

「でも…」

平野が刀身を握り締めながら、2代目を見上げた。

「大丈夫。3代目に任せよう。とにかく、ここから出るな。」

2代目は優しくそう言い、険しい表情を庭に向けた。

……

短刀「薬研籐四郎」は、黒い影の刀を、かろうじて刀身で防いでい
た。何度も弾き上げたが、まわりつくように迫ってくる。

「薬研つ!!」

3代目が、走りながら刀身を出現させて飛び上がり、黒い影を背後
から叩き斬った。

薬研は、仰向けに倒れた。

「薬研っ！」

3代目が、その薬研の体を起こそうとした。が、薬研が首を振って
言った。

「大丈夫です…。気が抜けただけです。」

「怪我はないか？」

「はい。ですが、とにかくしつこくて…」

「さすがだ。よく耐えたもんだよ。」

3代目が感心した声でそう言い、薬研の肩を叩いた。

……

本舎―

「防ぐ方法はないのか？そのウイルスとやらを…。」

長谷部の部屋で、1代目「大俱利伽羅」が言った。

「俺に言われたって…。」

長谷部が、頭を抱えている。

「頼りの4代目は臥せってるし、主とは連絡が取れないし…。」

「道を絶たれているってことか？」

「だろうな。だが、そのウイルスとやらは、入ってくる。」

「やつらだけが通れる道があるんじゃないのか？」

「…そうなんだろうか？だとしたら、よけいにやっかいだな。」

1代目が、大きく息をついた。

……

「恐らく、増殖しているんだ。」

4代目はうつぶせに寝たまま、前にいる2代目に言った。

「増殖!？」

「そうだ。」

「石切丸さんが、いくら札を書いても足りないのはそういうことか。」

2代目が、ため息をついた。そして後ろ手に襖を開き、外に誰もいないことを確かめると、再び閉じた。

「計画を実行したいところだが、お前が動けないとなると…。」

4代目は、体を起こそうとした。2代目がその体を押さえた。

「4代目！駄目だっ!」

「…このままじゃ、本丸が奴らに乗っ取られてしまう。」

「わかってる！だが、ちゃんと怪我を治したからじゃないと駄目だ!」

4代目は、不甲斐なさに唇を噛んだ。

……

本丸に「短刀は宿舎から出ないように」という、長谷部からの通達が出された。

太刀、打刀も、1人での行動が禁止された。

……

「踏んでごめんよ君達。でもこうしないと、防御が強すぎて君達を出してやれないから。ほら、早くその武装を解いてよ。…そうだそう

だ。いい子だ。…いたっ！まだ抵抗するのかい？君は、本当に恥ずかしがりやだねえ。」

「光忠」

獅子王があきれ顔で、落ちている「いが栗」を踏んで回りながら言った。

「栗に話しかけるな。おかしい気持ちになる。」

「だって、かわいそうじゃないか。」

光忠がそう言いながら、割れたイガから栗を取り出した。

「ほおら、つつかまえたー！」

「……」

獅子王は苦笑しながら、いが栗を踏んだ。

「しかし、こんなことしていいのかわ？」

光忠は、獅子王の言葉にふと表情を曇らせた。獅子王が続けた。

「この空の具合といい、どんどんひどくなっているような気がするんだが……」

光忠が、呟くように答えた。

「今は…短刀達の心を、できるだけ平穏にしてやるのが先決だ。」

「…確かにな…。こんな状況じゃ、この本丸がどうなるのか不安にならないわけがない。」

獅子王がそう言い、黙っていが栗を踏みつけた。

「あつ、もつと優しく踏んであげて！」

光忠の言葉に、獅子王はため息をついた。

……

「乱（みだれ）ー！」

ふてくされ顔で自室にいた1代目「乱籐四郎」は、その声にはっと顔を上げた。

障子が開き、3代目「大俱利伽羅」が顔を出した。

「俱利伽羅！」

「暇を持て余してる顔だな。」

3代目はそう言い、部屋に入ると障子を閉じた。手には、ケーキの乗った皿とスプーンを持っている。

「差し入れだ。光忠と作ったんだ。」

「ありがとう！」

「他の短刀達のは、光忠が冷蔵庫に入れてるから。」

「モンブランね。」

乱が、前に置かれたケーキを見ながら言った。

「はい！」「大俱利伽羅」が「大栗から」作りましたっ！」

「きやははっ！」

3代目の親父ギャグに、乱が笑った。その顔を、3代目は少し寂しげに見た。

(この笑顔も、もう見納めなのかも知れないな…)

そう思った。乱が「俱利伽羅のは？」と言った。

「俺は、味見で食いすぎてさ。」

3代目の返答に、乱がまた笑った。

3代目はスプーンを取り、モンブランのクリームを掬うと「はい、あーん」と言った。乱が嬉しそうにそのクリームを食べた。

「美味しいか？」

「美味しいっ！」

「良かった。」

「はい、じゃあ俱利伽羅も！」

「だから、俺は食べすぎで…」

「あーんしてっ！」

3代目は困ったような顔をしながらも、口を開いた。その口に乱がクリームに乗ったスプーンをそつと入れた。3代目がそれを銜えた。

「…ちよつと…俱利伽羅！」

スプーンが抜けない。3代目が銜えたまま離さないのだ。

「俱利伽羅、スプーンは食べちゃ駄目っ!!」

乱が笑いながらスプーンを抜こうとするが、3代目は面白がって離さない。

「やあだあ、俱利伽羅ったらもおおっ！」

乱がそう言ったとき、3代目の目がふと障子に向いた。

「あ」

少し開いた障子の隙間から、短刀達が覗いていた。

……

「4代目の体、案外筋肉質なんだな。」

上半身をはだけている4代目の背中に、薬の塗られた大きなガーゼを貼りながら、2代目が言った。

「そうか？」

「きゃしゃに見えて、結構筋肉ついてる。はい、できたよ。」

2代目はそう言うと、傍に置いたカッターシャツを肩からかけてやった。

「これ誰の？」

4代目が、背中の傷が開かないようにそつと袖に手を通しながら尋ねた。普段はTシャツを着ているのだが、かぶりものはまだ着ることができない。

2代目が笑いながら言った。

「お前が、ホストの格好した時に着てたシャツ。」

「ああ、2代目が女装した時の。」

「それを言うなっ!!」

4代目は、目を細めてくすくすと笑った。2代目はその顔を見て、ふと眉を曇らせた。

(やつと、4代目にも表情が出てきたのに……。俺達と心中させるのは惜しいな……)

そう思った。

その時、廊下を歩く足音がした。その足音で、2代目と4代目は目を見開いた。

「どうだ？4代目具合は。」

1代目「大俱利伽羅」が顔を出した。

「1代目ー」

4代目は、組んでいたあぐらから正座にかえようとした。1代目が慌てるように4代目の肩に手を乗せた。

「そのままで！あまり動くな。」

「はい……」

4代目は、体を元にもどした。2代目は4代目の後ろで座っている。

1代目は2人の前にあぐらを掻いて座り、微笑みながら言った。

「手入部屋を覗いたら、宿舎に戻ったって聞いてね。」

「ありがとうございます。」

「お前は今まで働きすぎた。今のうちに休んでおくんだ。」

「…はい。」

「1代目」

2代目が、4代目の後ろから言った。

「なんだ、2代目」

「主の方はどう？長谷部さん、何か言ってた？」

「相変わらず、主とは断線したままだ。なのに、妖魔はどんどん増えていつている。どうすればいいのか、頭を悩ませているところだ。」

4代目が、うつむいた。

「ただ、石切丸の札のおかげで、宿舎だけは守られている。外に出なければ、危険はない。…だが、それもいつまで持つものかわからないな。」

1代目が、そう言い大きく息をついた。

その時、光忠が息を切らして、庭から現れた。

「俱利伽羅！」

1代目は光忠に振り返り、腰を上げた。

「どうしたっ！」

「本舎が、妖魔に囲まれてる！」

「何っ!？」

4代目が思わず腰を上げた。2代目が慌てて、その4代目の肩を押しさえた。1代目は「動くなよ」と4代目に言ってから、光忠を追った。

4代目は「くそっ」と毒づき、目に手を当てた。

「計画の実行を少しでも早くすすめられるように、傷を治すことに集中しろ。」

2代目は、そう4代目の肩を叩いて言うと、部屋を出て行った。

……

「石切丸さん！」

2代目は、祈祷所の戸を開いた。

「!!石切丸さんっ!?!」

石切丸が祭壇の前で、うずくまっている。妖魔が増殖しているため、石切丸の霊気が弱ってきてきているのだった。

「…すまぬ…」

石切丸が、自分の背を抱え込んだ2代目に言った。

「私の力が、限界に来ている…」

「!…」

石切丸は、息苦しそうに言った。

「札は…書くだけ書いたが…どこまで…効力が持つか…わからない…」

「石切丸さん、ここに寝て。」

2代目がゆっくりと、石切丸の体を横たえさせた。

「獅子王さんを呼んで、手入部屋に運んでもらうから、もう少し我慢して。」

石切丸が、うなずいた。

「…後は…俺達に任せて。」

そう2代目は呟くと、きつと目を上げ、部屋を飛び出した。

……

2代目が本舎に着いた時は、妖魔たちは姿を消していた。

2代目が長谷部の部屋に入ると、1代目が光忠と並んで座り、その前に長谷部がぐったりと、武装のまま体を横たえていた。

「長谷部さん！」

「大丈夫だ。怪我はない。」

1代目が、2代目を見上げながら言った。

「出陣よりきつかったな。」

長谷部はそう言い、ゆっくりと体を起こした。2代目は、1代目の横に座った。

「石切丸さんが…今、手入部屋に。」

「!石切丸がっ!?!」

3人がそう同時に言い、2代目を見た。

「はい。限界が来たって…。」

「…そうか…やつ独りで戦わせていたようなもんだったからな。」

1代目が、ため息をつきながら言った。光忠が、困ったように呟いた。

「しかし、石切丸までやられたとなると…どうしたものか。」

「…せめてラインが繋がっていれば、解決策も調べられるのに。」

長谷部がそう言い「痛っ」と頭を押さえた。

「長谷部!？」

1代目と光忠が、頭を抱えてうつむく長谷部の体を支え、再び寝かせた。

「お前も無理をしすぎだ。睡眠が十分に取れてないんだろう。」

1代目が長谷部に言った。長谷部は目を閉じ、大きくため息をついた。

「今、床をひいてやる。とにかく寝ろ。」

光忠がそう言い、立ち上がった。2代目が「手伝うよ」と言っ、その光忠を追った。

……

夜―

3代目が神妙な表情で、第3部隊宿舎の縁側に座っている。

(皆が、疲れきってる…)

そう思い、うつむいた。

(1代目も光忠も、元氣そうに見せてるけど…それもいつまで持つか…)

3代目は、ふと部屋の中を見て眉をしかめた。

(4代目は? 傷は塞がったけど、まだ動けないんじゃないやなかったっけ?)
床も引いていないのを見て、3代目はしばらく考え込んでいたが

「あっ」と叫んで、立ち上がった。

……

4代目は、武装姿で本舎に向かっていた。

(独りで…どこまでできるだろう。)

そう思いながら、歩いている。

(もし、何もできなかつたら?)

4代目は、立ち止まった。

(何の役にも立たなかつたら...?)

「つーかまーえた!」

背中から抱きつかれ、4代目は目を見張った。

.....

第3部隊の宿舎に引き戻された4代目は、3代目と並んで縁側に座っていた。

「お前の気持ちもわかるけど...」

3代目が、月も星もない空を見上げながら言った。

「この現象を見てわかるとおり、独りでなんとかなる相手じゃないだろ。」

4代目は、うつむいた。

「背中はどうだ? さつき思わず抱きついて「しまった」って思ったんだけど...」

3代目の言葉に、4代目が苦笑しながら言った。

「傷はもう塞がってるんだ。ただ、思うように体が動かないだけだ。」

「そうか。しかし、それだとまだ計画を進められないな。」

「.....」

4代目はうつむいた。しばらくの沈黙の後、3代目が口を開いた。

「これは、俺のわがままなだけだよ。」

「? 何?」

「もう少し、ここにいるのを堪能したいって思ってたさ。」

4代目は目を見張った。3代目がうつむき加減に言った。

「死ぬことは怖くない。だけでももう少しだけ、短刀達と過ごす時間を楽しみたい。...言い方は悪いけど、4代目のおかげで、今、それができているんだ。」

「! 3代目...」

「その分、短刀達が危険にさらされるんだけどな...。」

4代目は、愁いを帯びた3代目の横顔を見た。

「…ほんと、俺のわがままだ。」

3代目が、ぽつりと呟いた。

……

翌日 第2部隊宿舎―

2代目は、目の前にいる3代目と4代目に厳しい表情で言った。

「石切丸さんが倒れた今、もう、猶予がない。」

2人が、うなずいた。

「4代目、無理をさせることになるが…」

「俺はもう大丈夫だ。」

4代目は、2代目の言葉をさえぎるように言った。

「そうか。」

2代目が微笑んだ。3代目が、4代目の肩を叩いた。

「よし…。今日の深夜に計画実行だ。」

2代目のその言葉に、2人はうなずいた。

永遠の別れ

本丸―

皆が寝静まった、静かな夜―

2代目3代目「大俱利伽羅」は、武装姿で鍛刀部屋の炉の前にいた。

「4代目が、パソコンの中の扉を開いたら、炎が上がるんだな？」

「そうだ。」

2人は、じつと炎が上がるのを待っている。

「3代目」

「うん？」

「炎が上がったら、とりあえず俺が先に飛び込む。お前は4代目を待ってやってくれないか？」

「そんな、わかりやすい手に乗るか。」

3代目が即答した。2代目は、一瞬目を見開いて閉じた。

「やっぱりだめか。」

「独りで行こうたって、そうは行かない。4代目と約束しただろう。」

3人で戦うって。」

「…ごめん…」

2代目が、目を閉じたまま言った。

「…しかし遅いな、4代目。扉を開くのに手間取ってるのか？」

3代目が何かをごまかすように、2代目に背を向けて言った。

その時、4代目が急ぐように入ってきた。そして後ろを見渡し誰もいないことを確認すると、鍛刀部屋の戸を閉じた。

「遅くなってすまない。」

「!?扉は？開かなかったのか？」

2代目が驚いてそう言うと「時間をずらしたんだ」と4代目が答えた。

「時間をずらした？」

「扉を開く時間を、5分遅らせた。それなら2代目達が、俺を置いていくようなことにはならないだろうって思ってた。」

2代目3代目は、目を見開いた。3代目が、笑いながら言った。「4代目にもお見通しか。無駄な抵抗だったな、2代目。」

2代目が、頭を指で搔いた。4代目は、苦笑してから言った。「そろそろ開く。万一のために30秒で扉を閉じるように設定したから、炎が上がったらすぐに飛び込んでくれ。炎に消えられてしまったら、どうにもならない。」

2代目3代目は、表情を引き締めてうなずいた。

…しばらくして、轟音と共に、炉から炎が上がった。

「！行くぞー！」

2代目は、顔だけを後ろに向け「さよなら皆」と呟いてから、炎に飛び込んだ。3代目は、背を向けたまま「さよなら」と呟き、続いて飛び込む。そして4代目は「皆の幸せを」と呟いて、飛び込んだ。

…炉の炎が消え、静寂が訪れた。

……

3人は、ゆっくりと目を開いた。

闇闇が広がっている。ただ、3人の体から発するオーラのおかげで、お互いの顔は見えた。

「なんだ。あつさりしたもんだな。」

3代目が、辺りを見渡して言った。

「鍛刀の時の方が、劇的だったな。」

2代目が苦笑しながら言った。「確かに」と4代目が笑った。すると、1本の道が現れた。2代目が苦笑した。

「向こうから、お誘いだ。」

「しやくだが、闇雲に歩くのも無駄だしな。」

「行こう。」

2代目が、歩き出した。3代目、4代目が続く。

……

『ワクチンより効力が高い、ウィルスを撃退する方法を…ほんと偶然なんだけど、見つけてしまったんだ。』

4代目の言葉に、2代目と3代目が目を見張った。

『どういう方法だ?』

2代目が言った。4代目が答えた。

『パソコン…というより、ラインの中に入るんだ。』

『?』

『わかりやすくいうと、この身でウイルスを直接撃退するんだ。』

『できるのか!?!』

3代目が思わず声を上げた。2代目も目を見張っている。4代目は、うなずいた。

『だけど、ラインの中に入れてとしても、ウイルスがどんなものか、全くわからずに戦わなくてはならない。』

4代目の言葉に、2人が小さくうなずいた。

『俺達がいる世界とは、全く違う世界だから、出陣のようにはいかないと思うんだ。』

『…お前、それを独りでしょうとしたのか?』

2代目が、厳しい表情で言った。4代目がうなずいた。

『俺は、まだこの本丸に来て間もない。いなくなっても、誰も気にしないだろうって思ったんだ。』

『4代目!』

2代目が腰を浮かせたのを見て、3代目が止めた。

『最後まで話を聞こう。』

そう3代目に言われ、2代目はうなずいて座りなおした。

……………

3人は、暗闇を歩き続けている。3代目が、不思議そうに言った。

『すぐに襲われると思ったが、えらい静かだな。』

『こつちの様子を、伺ってるんじゃないか?』

2代目がそう答えてから、思い出したように言った。

『そういや、3代目。さっき、腰布がどうのこうのって言ってなかった?』

『ああ、前の出陣で破られてさ。それ直してなかったなって思って…』

『そのままか?』

『いや、あのビデオを撮った後に、4代目に直してもらった。』

2代目が、4代目の顔を驚いて見ながら言った。

「女子力たかーい」

普段どおりの2人の会話に、4代目が苦笑した。

.....

『恐らく、ラインの中に入れば、主のいる現世へ抜け出すことはできないし、俺達のいる本丸にも戻ってこられない。』

『閉じ込められるってわけか?』

4代目のその言葉に、3代目が尋ねた。

『いや、消滅だ。』

2代目3代目が、息を呑んだ。4代目が、続けた。

『俺達がいる本丸と、主のいる現世とは次元が違う。次元の説明はうまくできないが、結果から言うと、俺達は主のいる高い次元では、存在することはできない。かと言って、退路は絶たれて行くから、後戻りもできない。』

『退路を絶たれるとは?』

『明日は来るけど、昨日には戻れないだろうか?それと同じ原理だ。』

2代目が、小さくうなずいた。3代目は、黙り込んでいる。4代目は、頭の中を整理してから口を開いた。

『恐らく、俺達の存在する本丸と、主のいる現世の間をつなぐ道があつて、その中にウイルスがいる。道を断てば、ウイルスが本丸に流れ込むことはないが、それだと、主も本丸に来られなくなる。』

『それじゃ、この本丸が存在する意味がないな。』

2代目の言葉に、4代目がうなずいた。

.....

3人は、暗闇を歩き続けている。

「あ、そう言えば4代目。さつき3人で撮った写真、主に送ったのか?」

3代目が、隣を歩く4代目に尋ねた。

「ああ、送ったには送ったが、すぐに見られたら困るから、1日遅れて届くようにしておいた。」

「おー」

4代目の答えに、2代目3代目が感心した声を上げた。3代目が

言った。

「あれ、いい写真だ。」

「うん。」

「4代目のあんな笑顔見るの、最初で最後だよな。」

「やめてよ。恥ずかしい。」

4代目がそう言っつて、うつむいた。

.....

『要するにさ』

3代目が、口を開いた。

『そのウィルスを、なんとかすればいいってわけなんだな。俺達が消滅する前に。』

『そうだ。だが、ウィルスを撃退する方法がわからない。撃退できないければ、俺達が無駄に消滅することになる。』

『俺達は神だよ。これでも。』

3代目が言った。2代目4代目が、目を見開いて3代目を見た。

『つまり、俺達の本体は「神体」だつてこと。神体に斬れない物はないよ。』

『...ちよつと説得力に欠けるが...』

2代目が苦笑しながら言った。

『どつちにしても、そのラインというものの中に入らなければ、どうにもならないわけだ。』

4代目は見張ったままの目を、2代目に向けた。

『俺達でやれることをしよう。消滅なんて怖くない。』

2代目が、微笑みながら言った。

『俺達が消滅しても、1代目が残っていればいいんだから。』

.....

2代目が、立ち止まった。

3、4代目も立ち止まって、2代目の前を見た。

「.....」

道が3本に分かれている。暗闇の中で、道だけが輝いて見えた。

「.....ここからは、1人で来いって事か。」

2代目が、低い声で言った。

…3人は沈黙した。

「共に戦って死にたかったが、向こうが許さないようだ。」

2代目がそう言い、2人に振り返った。3代目が、苦笑しながら言った。

「結局、独りで戦って、独りで死ぬのか。」

「大俱利伽羅の宿命だな。」

4代目のその言葉に、2代目が「そういうことだ」と笑った。

「ここでお別れだ。」

2代目がそう言うと、3人は誰からともなく、肩を組み合い円陣を組んだ。お互いの頭を合わせ、目を閉じる。

2代目が、口を開いた。

「お前達に出会えた事を、幸せに思う。」

「……」

「今まで、本当にありがとう。」

3代目が嗚咽をもらした。涙がとめどなく流れている。

「お前、泣きすぎ。」

2代目が、少しくだけた口調で言った。3代目は、嗚咽を抑えようとせずと言った。

「…こんなに…別れが…つらいだなんて…思つて…なかつた…」

円陣を組んだまま、2代目と4代目の手が3代目の頭を撫でる。2代目は、4代目の頭にも手を乗せた。

4代目の閉じた目からも、涙が溢れ出ている。

「大俱利伽羅」の名に恥じないよう、最期まで戦い、潔く散ろう。」

2代目のその言葉に、2人は小さくうなずいた。

3人は、同時に言った。

「さよなら、永遠に。」

……

……

……

……

翌朝――

「おい！倶利伽羅起きろ！」

光忠に、いきなり叩き起こされた1代目「大倶利伽羅」は、不機嫌に体を起こした。

「なんだ、いったい……」

「晴れてるんだ！」

「え？」

「空が晴れてるんだ！妖魔たちもいない！」

「何っ!？」

1代目は、開いた障子から庭を見て目を見張った。

みごとに晴れている。あまりの青い空に、1代目はしばらく言葉がでなかった。

光忠が縁側に座り、伸びをしながらいった。

「主が、ワクチンってやつを見つけてくれたんじゃない？」

「長谷部が、そう言ってるのか？」

「いや、まだ本舎には行ってないけど、それくらいしかあれだけいた妖魔が、いきなり消えるなんてことないんじゃない？」

「…そうか…そうだな。」

1代目がそう言い、自分も縁側に出て、光忠の横に立った。

(訳がわからないが、とりあえずは平和が戻った…。2代目達も喜んでいるだろう。後で、宿舎に行ってみるか…)

1代目がそう思ったとき、2代目「今剣(いまのつるぎ)」が、1代目達に向かって走ってきた。泣きそうな表情をしている。

「1代目様！光忠様！」

「？」

「どうした、いまつる？何をそんな泣きそうな顔をしてるんだ？」

光忠が、自分の前に立った今剣の手を取って言った。

「2代目さんがいないの…」

「え？」

「お部屋にも、どこにもいないの。」

1代目と光忠は、顔を見合わせた。

「それで、第3部隊の宿舎に行ってみたら、3代目さんと4代目さんもいなくなってる…」

「何？3代目達もか？」

今剣のその言葉に、1代目が驚いた声を上げたが、光忠が微笑みながら今剣の頭をなでて言った。

「きつと、2代目達も晴れたのがうれしくって、大庭の方で鍛錬でもしてるんじゃない？大庭には行った？」

「ううん。」

今剣が、少しほっとした表情をした。

「よし、じゃ今から一緒に行ってみよう。」

光忠が、微笑みながら言った。1代目が「光忠」と言った。今剣の手を引いて歩き出した光忠が、振り返った。

「何？倶利伽羅」

「俺は、長谷部のところに行ってみるよ。あいつら、いるかもしれないし。」

「そうだな。じゃあ2代目達がいたら、宿舎にすぐに戻るように言ってくれるかい？」

「わかった。」

1代目は、本舎に向かって走った。

……

「長谷部！」

1代目が、長谷部の部屋の襖を開いた。

「2代目達が、ここに…」

言いかけて、1代目は目を見張った。

長谷部は、ビデオカメラに残された動画をモニターに映して見ている。

モニターには、2代目3代目4代目「大倶利伽羅」が武装姿で並んで座っている姿が映っている。

1代目は、立ち尽くした。

『1代目より先に死ぬ俺達を、許してとは言えないけど』
『俺達の気持ちは、1代目ならわかつてもらえると思います。』
長谷部が振り返り、濡れた目で1代目を見上げた。

遺されたビデオレター

本丸―

第1部隊「大広間」の大きなモニターに、出陣前の「大俱利伽羅」達が3人並んで、本丸の仲間達へ話しかけているビデオが映し出されている。

短刀達が驚いている顔、泣いている顔、乱が口に両手を当てて、涙している顔が並ぶ。

光忠、長谷部が、そのモニターの横で正座をし、うつむいている。

短刀達の後ろにいる石切丸がうつむき、獅子王はモニターから顔を背けている。

そして、1代目「大俱利伽羅」は、大広間の襖1枚隔てた廊下の柱にもたれて座り、2代目達の声だけを聞いていた。

……

女審神者は、パソコンから本丸とラインをつなごうとしていた。

だが、なかなか繋がらない。

困り果てて頭を抱えた時、やっとローディングが始まった。

「!!」

慌てて、本丸を表示すると、長谷部からメールが届いていた。

女審神者は、急ぐようにメールを開いた。

『主様 非常に辛い事をお伝えしなければなりません。』

ラインが寸断している間に、2代目、3代目、4代目の「大俱利伽羅」3体が、この本丸を守るために殉職いたしました。』

女審神者は目を見開いた。

『添付させていただいた動画は、彼らが出陣する前に遺してくれていたものです。どうか、最後まで見てやってください。』

またこの動画は、ラインが寸断されている間に、本丸の仲間達で先に見させていただきました。

無礼をお許し下さい。

へし切長谷部』

女審神者は、震える指で動画を開いた。

…

カチツという音と共に、画面が明るくなり、閉じられた障子が映る。

2代目「(画面上から、顔を横にして現れる)こんな感じ?」

3代目の声「いいんじゃない?」

2代目「じゃあ、2人ともこつちこつち」

3代目、4代目が両端から現れて、2代目を挟んで座る。

2代目「主様、本丸の皆様へ、お伝えしたいことがあります。」

3代目「俺達「大俱利伽羅」3人は、これから出陣します。場所は言えません。ただ、もう戻って来れません。」

4代目「俺達、この本丸に生まれて幸せでした。きつと、この大俱利伽羅よりも幸せだったと思っています。」

2代目「だから俺達の命と引き換えに、この本丸を守り抜きたい。」

3代目「それが、俺達を最後まで育ててくれた、皆様への恩返しだと思います。」

4代目「これまで、本当にお世話になりました。」

3人共、丁寧に頭を下げる。

2代目「(3代目と4代目を交互に見ながら)じゃ、ここから個人的に言いたい事をどうぞ。」

3代目「2代目からどうぞ。」

4代目が、2代目に向いてうなづく。

2代目「あ、そう?じゃあ…遠慮なく。」

2代目そう言って、2人に交互に会釈する。2人も2代目を見てうなづく。

2代目「燭台切光忠様…あー堅苦しいから、普通に戻っていい?」

2人笑って、それぞれ「いいよ」と言う。

2代目「光忠、最後まで俺達の面倒を見てくれてありがとう。ただ、心残りがあるんだ。光忠、俺達の事は「俱利伽羅」って呼んでくれなかつたよね。」

3代目「(膝を叩いて)そういや、そうだなー」

4代目「ほんとだ。」

2代目「おい、4代目は仕方ないけど、3代目、今更かい?」

3代目「気にしたことなかった。」

2代目「1度でいいから、呼んで欲しかったなーって思ってる。」

3代目「確かにな。」

4代目「でもそれは、俺達が1代目を超えられなかったからじゃないか?」

2代目「超えるのは無理だわー。」

3代目「じゃあ、無理だと言うことで。」

2代目「はい(あつさり)。そして、長谷部さん、石切丸さん、獅子王さん、いろいろとご迷惑をおかけしました。」

3代目「そうだなあ。出陣やら何やらで何かと手を煩わせちゃったからな。」

2代目「俺、獅子王さんには、しよっぱなから迷惑かけちゃって。」

3代目「動けない2代目を、肩に担いで帰ってくれたってやつ?」

2代目「そう。重かったと思うんだー。短刀達だって、起きてる時だっこするのと、眠ってる時にだっこするのと重さ全然ちがうじゃない。」

4代目「確かに。それに俺たちの武装具、結構重いしな。」

2代目「(手を合わせて) 本当にありがとう(ぎい)ました。」

3代目「俺は、石切丸さんに迷惑をかけた事が多いかな。」

4代目「俺も、闇落ちで救ってもらって…」

2代目「えっ!?!闇落ちの記憶あるの!?!」

4代目「あるよ。」

3代目「俺もそうなんだけど、短刀達と餃子つくってる記憶と、1代目に刺された記憶と同時進行で残ってるんだ。」

2代目「どういうこと?」

4代目「すぐく変なんだけど、短刀達と餃子作りながら、1代目と戦ってるみたいな感じ。」

2代目、大笑いする。

3代目「(笑って) 俺は餃子づくりながら、刺された。」

2代目「あの時は、お前たちが消えてしまったってショック受けたのに、何も無いように出てくるんだもんなあ。」

4代目「(頭を下げて) 本当に、(ゴ)迷惑をおかけしました。」

2代目「で、長谷部さんだな。たぶん、今臥せってるのって、主(あるじ)に会えないのも一因だと思うんだ。」

3代目「それが全部じゃないか？主と相思相愛だもんなあ。」

4代目「うちのNo. 1クールマンなのに、主に会ったとたん、風船がしぼんだような顔になる。」

3代目「(吹き出す) 落差大きいよな。今回、その顔が見られないのが残念だなあ。」

2代目「主にも、もう1度会いたかったね。優しいお母さん。」

3代目「(しんみり) そうだな…。」

4代目「(うつむいて黙っている)」

2代目「はいっ気を取り直して、次3代目、どうぞ。」

3代目「はい！まず、俺からは短刀達へ。お前達と過(ご)した日々は本当に楽しかった。特に、皆で「枕投げ」をしたことは、俺の中で1番の楽しい思い出。」

2代目「枕投げー！ほんと、楽しかったなあれ。」

4代目「俺も、やりたかった。」

3代目「俺達はもういないけど、あれも鍛錬のうちだ。週に1回はするよ。」

2、4代目が笑う。

3代目「それから、乱。俺がいなくなっても、笑顔をなくさないこと。お前は笑顔でいるのが一番可愛いんだからな。後、自分の事を好きになること。約束だぞ。」

2代目「乱には、女装で世話になったな。」

3代目「お前、本当に可愛かったよ。」

4代目「うん。可愛かった。」

2代目「俺は、4代目にも女装させたかったけどなあ。」

3代目「あー確かに！」

4代目「(笑いながら) それは勘弁して。」

3代目「そう言えば、あの時の俺達が踊った動画、結局消されたんだって。」

2代目「えっ！そうなのか？」

3代目「何でも、長谷部さんがビデオカメラの操作間違つて、消しちゃつたつて。」

4代目「(笑いながら) 良かったな、2代目。」

2代目「良かったー…これで思い残すことないわ。はい、じゃあ4代目どうぞ。」

4代目「俺は、本丸の皆様。短い間でしたが、レプリカかもしれない俺を最後まで、この2代目3代目と同じように接して下さい、ありがとうございます。今、こうして2代目達と一緒に死ぬことを誇りに思います。」

3代目「いいこと言うねー。」

2代目「巻き込んだじゃつてごめんよ。」

4代目「いや巻き込んだのは俺だよ。それに俺だけ置いてかれたら、また闇落ちすると思う。」

2、3代目、笑う。

しばしの沈黙―

2代目「では。」

3代目「うん。」

4代目「(黙つてうなづく)」

3人、神妙な表情でこちらを向く。

3人「1代目大俱利伽羅様」

4代目「できの悪い俺達を、最後まで育てて下さりありがとうございます。ありがとうございました。」

3代目「俺達、1代目の下(もと)に生まれて本当によかつたと思つています。」

2代目「1代目より先に死ぬ俺達を、許してとは言えないけど」

4代目「俺達の気持ちは、1代目ならわかつてもらえると思ひます。」

3代目「大俱利伽羅」は1人でいい。実は俺達、ずっとそう思つてました。」

2代目「これからも、俺達のみまで本丸を守って下さい。」

3人「(同時に頭を下げ) 本当にお世話になりました。」

3人、頭を下げたまま、しばらく黙り込んでしまう。

2代目「(2人にそれぞれ向いて) ちよつと他人行儀過ぎたか?」

3代目「いいんじゃない? 言いたいこといっぱいあるけど…これ以上は俺無理。(目をさつと拭う)」

4代目「俺も。」

2代目が「さて」と言つて、さつと顔を上げる。目が真っ赤になっている。

2代目「じゃあ、あれ行くか。」

4代目「(涙を拭いながら) あれ、まじで行くのか?」

3代目「死んでから言えないから、言つておこうよ。」

2代目「…恥ずかしい…けど、言うぞ。」

3人、前を向く。

2代目「せーの」

3人「(全員手を伸ばして) 皆、愛してるぞー!」
言つてから、すぐにそれぞれ顔を伏せたり、頭を抱えたりする。

2代目「あー恥ずかしい。じゃあ行くかつ!」

2代目が立ち上がると同時に、画面がゆっくり天井を向く。

3人が「あー!」と声を上げる。ガタンという音とともに、
真っ暗になるが、音だけが残っている。

「わー! ビデオ倒れた!」

「2代目、コード引つ掛けただろ!」

「壊れたらどうするんだよ! 長谷部さんに大目玉だぞ!」

「え? 大丈夫これ?」

「俺達、写つてないような。」

「声だけ?」

「さっきのは残ってる?」

「さあ?」

「さあつて。」

「あつおい、もうタイムリミットだ! 出陣出陣!」

「あー: 長谷部さん壊れてたらごめんなさい。」

「早く！あんまり騒いだら、皆、目を覚ますぞ。」

「ビデオ切って切って」

「なあ、俺の腰布さー…」

そこで、音も切れる。

静寂ー。

笑顔でさよならを（終）

本丸―

短刀達がそれぞれ芝生に座り、空を見上げている。

「空つて…こんなにな…青かったんだね。」

今剣が、しゃくりあげながら呟いた。短刀達がそれぞれにうなずき、涙を拭っている。

五虎退が、嗚咽をこらえきれず泣き出した。

薬研籐四郎が、その五虎退の頭を抱き、涙を堪える。

……

乱が花畑の中に座り込み、作ったばかりのシロツメグサの花冠を、手に持って見つめている。

「俱利伽羅がいなくなっても笑顔でなんて…できるわけないじゃない。」

そう呟き、ポロポロと涙を流している。

……

鍛刀部屋の炉の前で、短刀の前田藤四郎と平野藤四郎が、膝を立てて座っている。

獅子王が戸を開いた。

そして中の2人を見て、表情を曇らせた。

「待ってるのか。」

獅子王は、傍の床机に座りながら、2人に話しかけた。

2人は、黙ってうなずいた。

「大俱利伽羅さん、きつと帰って来る。」

前田が呟くように言った。平野がうなずいた。

「……」

獅子王は、涙を堪えながら2人の頭を撫でると、黙って鍛刀部屋を出て行った。

……

石切丸は、池のほとりに立ち、空を見上げている。

「…私に…もつと力があれば…」

そう呟き、うつむいた。

……

長谷部と光忠が、宿舎の縁側に座り、空を見上げている。
光忠が口を開く。

「あいつらが戻ってきたら「俱利伽羅」って呼んでやらなくちゃな。」
長谷部が、力なく笑う。

「でもそれだと、どの大俱利伽羅を呼んだのかわからないだろう。」
「そうだな……」

光忠も力なく笑い、やがてうつむいて目を手で覆う。そのふるえる肩に、長谷部が手を乗せた。

……

1代目大俱利伽羅は、武装姿で第1宿舎の大庭に立っていた。

その大俱利伽羅の目の前で、ジャージ姿の幻の大俱利伽羅たちが、鬼ごっこをして走り回っている。

『2代目！案外、機動低いな！』

『やかましいっ！ちよこまか動くな3代目！』

『おい！4代目！座り込んじゃって、もうばてたのか？お前！』

『俺、タイム！2代目も3代目も元気すぎ……』

『タイムなんてルールはない！ほら立て！』

『ほら、4代目立てよ！』

『やめてー！腕ちぎれるー！』

2代目3代目がそれぞれ、4代目の手を引っ張る姿で、幻が消える。

大俱利伽羅が、その場に崩れるように両膝と両手をつき、肩を震わせて泣く。

……
…本丸の空は、付喪神達の悲しみをよそに、青く晴れ渡っている。

……

女審神者は、パソコンの前で顔を覆って泣いていた。

…その時、メールが入った。

「……」

女審神者は涙を拭いながら、メールを開いてみた。

……

『主様 命を授けて下さったのに、こんな形で終わらせる俺達を、どうぞお許しください』

……

2代目3代目4代目「大俱利伽羅」がそれぞれ、暗闇の中を傷つきながら前に進んでいる。

黒い影が3人を傷つけ、そして3人に斬られ消えていく。

……

『俺達、この本丸に生まれて本当に幸せでした。』

……

2代目が、地面に倒れ、息を弾ませる姿。

3代目が、背中を斬られ、のけぞる姿。

4代目が、膝から崩れ落ちる姿。

…だが、3人共、体勢を立て直し、前に進みだす。

……

『俺達の育った本丸が、永遠に平和でありますように…』

……

その3人の遠く前方に、光が差ししてきた。

3人共、目を見開き、足を引きずりながら歩いていく。

そして、近づいてきた光に向かって、3人は手を差し出した。

……

『大俱利伽羅より』

……

光に包まれると共に、3人の姿が塵（ちり）となって消えていく。

消える瞬間まで、笑顔で…。

……

パソコンの画面に、2代目3代目4代目の大俱利伽羅が武装姿で肩を組み合い、それぞれが満面の笑顔でピースをしている写真が映る。

—Fin—

Back music「それがあなたの幸せとしても」by He

avenz様

……

—妄想CAST—

1代目 大俱利伽羅「ku—ya様」式

2代目 大俱利伽羅「ES様」式

3代目 大俱利伽羅「RIRAKO様」式

4代目 大俱利伽羅「ミズ夕様」式

燭台切光忠「SAM様」式

へし切長谷部「XAIN様」式

今剣「ゆるん様」式

乱藤四郎「なかむら様」式

薬研藤四郎「ぱびこ様」式

前田藤四郎「2PC様」式

平野藤四郎「2PC様」式

五虎退「カクタス様」式

(特別出演)

獅子王「るか様」式

石切丸「帽子屋様」式

—未公開ショット—

1代目「大俱利伽羅」と光忠が、真剣な表情であやとりをしている。そこに長谷部も加わっている。

……

2代目「大俱利伽羅」と3代目「大俱利伽羅」が、短刀達とそれぞれ横並びになり「花いちもんめ」をしている。

……

3代目「大俱利伽羅」が縁側で大の字になり、子猫3匹を胸に乗せて眠っている。その両端を、2代目「大俱利伽羅」と4代目「大俱利伽羅」が挟み、笑いながら見ている。

……

1代目2代目「大俱利伽羅」と石切丸が、短刀達と一緒に餃子を食べている。

……
短刀達の枕投げ大会の様子。その中で、3代目「大俱利伽羅」が2代目「大俱利伽羅」の投げた枕が見事に、顔面に当たっている。

……
ジャージ姿の3代目「大俱利伽羅」が後ろを振り返りながら走っている。その後を、4代目「大俱利伽羅」が追い、何故か1代目「大俱利伽羅」をおぶった2代目「大俱利伽羅」が追っている。

……
3代目4代目「大俱利伽羅」がホスト姿で、格好良く並んで立っている。

……
女装で、化粧を施された2代目「大俱利伽羅」が、女の子らしくウインクしている顔のアップ。

……
ホスト姿の3代目「大俱利伽羅」が、酔っぱらって仰向けになって寝ている1代目「大俱利伽羅」の両足を両脇に抱え、廊下をひきずって歩いている。その後ろを、同じホスト姿の4代目「大俱利伽羅」が、光忠の両足を両脇に抱えて同じようにひきずり、その後ろを女装した2代目「大俱利伽羅」が、長谷部の両足を両脇に……（以下同文）

……
重傷の3代目「大俱利伽羅」の両脇を、自分たちも傷ついた体で支えて歩く1代目2代目「大俱利伽羅」。その3人に向かって、短刀達が駆け寄っている。そして、その短刀達の後ろを、光忠と長谷部が追っている姿。

……
4代目「大俱利伽羅」が口の端を上げて、こちらに流し目を送っている。

……
（上空カメラ）シロツメクサの花畑に、3代目「大俱利伽羅」が片方の

腕を枕に微笑みを見せて寝ころび、その胸を枕にして寝ている1代目「乱藤四郎」が、こちらに向かつて両手を挙げて笑顔を見せている。

……

(記念撮影)

あぐらをかいて座っている1代目「大俱利伽羅」の肩に、2代目「大俱利伽羅」が手を乗せてかがみ、3代目4代目が1代目を挟んで、片膝をついてこちらを笑顔で見ている。

……

光忠を先頭に、2代目3代目4代目「大俱利伽羅」が横並びになり、手に持ったトマトにキスをしながら、それぞれこちらを見ている。

……

長谷部をはさんだ2代目3代目4代目「大俱利伽羅」が全員正装して、持った花束を我先に差し出している。(プロポーズ?)

……

両手でピースしている獅子王の両端を、2代目3代目4代目「大俱利伽羅」が挟み、同じように全員両手でピースをしている。

……

あぐらをかき、両手を広げて微笑んで座っている石切丸の後ろから、十手観音のように「大俱利伽羅」達の腕だけが8本出ている。腕の本数から、1代目も混じっている模様。

……

1代目2代目「大俱利伽羅」を、3代目4代目「大俱利伽羅」が挟んだ全員が武装姿で刀身を持ち、厳しい表情で横1列に並んで歩いている。

……

大庭―

武装している1代目「大俱利伽羅」が、自分を抱く光忠の肩に顔を伏せ、泣いている様子。その背に長谷部が手を乗せて、うなだれている。

……

2代目3代目4代目「大俱利伽羅」が、現代の学生服（ブレザーに、
緩めた細ネクタイ）姿でカバンを持ち、並んでポーズをとっている。

.....

.....

.....

.....